

糖尿病

糖尿病の根本的な病態は“慢性的に高血糖が続く”ことです。そのため、中には糖尿病を発症すると、喉の渇き、尿量の増加、倦怠感、体重減少などが現れるケースもありますが、多くは自覚症状がないとされています。

一方、血糖値が高い状態が続くと、血液中に多量に存在するブドウ糖が血管を傷つけることが分かっています。その結果、目や腎臓、神経などにも十分な血液が流れにくくなることで糖尿病網膜症、腎不全、末梢神経障害などいわゆる“三大合併症”を引き起こすことも多々あります。

そして最終的には、失明、人工透析、足の切断など、日常生活に極めて大きな支障をきたす状態に陥る可能性も生じます。また、心筋梗塞や脳卒中などの病気の発症リスクも高くなります。

そのほかにも糖尿病を発症すると免疫力が低下していくため、風邪をはじめとした感染症にかかりやすくなり、高齢者では肺炎や尿路感染症などが重症化して命に関わる状態に陥るケースも少なくありません。

痛風

痛風発作は足の親指の付け根に生じることが多いのが特徴です。痛みを生じた箇所は赤く腫れ上がり、熱感を伴います。痛風発作は足の親指の付け根以外にも、足・膝・手などの関節にも起こります。痛風発作の痛みは耐え難いほどの激痛で、日常生活が困難になる人もいます。通常、24時間以内に痛みのピークを迎えますが、強い痛みが数日間続き、7～10日間で症状は治まります。

さらに、高尿酸血症を放置しておくと、手足の関節や耳たぶの皮膚の下にも尿酸塩の結晶が沈着してこぶのようになります。これを痛風結節といいます。痛風結節は、痛風発作と違い痛みが生じることはありません。しかし、進行すると関節が変形したり、骨の破壊が起こったりして日常生活に影響が出ます。

更年期障害

更年期障害の症状には、血管運動症状（ホットフラッシュなど）、精神的症状（イライラ、抑うつなど）、身体的症状の大きく3種類があります。

血管運動症状

のぼせ、顔のほてり（ホットフラッシュ）、発汗、動悸、息苦しさ、疲労感、頭痛、肩こり、めまいなど

精神的症状

気分の落ち込み、倦怠感、イライラ、意欲の低下、不眠、食欲低下など

身体的症状

腰痛、関節・筋肉痛、冷え、しびれ、疲れやすさ、湿疹、かゆみ、排尿障害、頻尿など

逆流性食道炎

逆流性食道炎の代表的な症状は、胸やけや呑酸（酸っぱいものが上がってくる）、食後の胸痛などとされています。また、就寝中に慢性的な逆流が生じている場合などは咳、声のかすれ、喉の違和感などが生じることがあります。

おたふく風邪（流行性耳下腺炎）

おたふく風邪は、耳下腺の周りに炎症が生じることから発熱が生じることに加えて、突然耳の下が腫れたり同部に痛みを伴ったりするようになります。片側から腫れることが多く、1～2日ほどのタイムラグを経て反対側の耳下腺も腫れるようになります。片側あるいは両側に腫れが見られますが、両側が腫れることが多く、症状は一週間ほどで徐々に治っていきます。また、唾液を作る組織に炎症が起きているため、食事摂取（特に酸っぱいもの）により唾液分泌が亢進すると、耳の下や顎の下の痛みが強くなるという特徴があります。

肺炎

症状は多彩ですが、発熱、咳、膿性痰が主な症状です。肺から胸膜まで炎症が広がることにより胸痛が生じる場合もあります。

重症になると呼吸が困難になったり、意識が悪くなったりすることがあります。また病原体によっては、筋肉痛や腹痛・下痢といった一見肺炎とは関連がなさそうな症状が出たり、高齢者では典型的な症状が目立たず、食欲低下や全身倦怠感などが主な症状となったりする場合があるため注意が必要です。

非定型肺炎は、頑固な咳がある、痰がない、基礎疾患がないあるいは軽い、年齢が若い、血液検査で白血球数が上がらないなどが特徴とされています。肺炎が治った後も、咳はしばらく続く場合があります。これを感染後咳嗽といいます。

熱中症

軽度の熱中症の場合めまいやだるさ、気持ち悪さなどの症状がみられ、重くなるにつれて吐き気を強く感じたり、意識障害をきたしたりすることがあります。具体的な症状は、重症度によってI度（軽症）、II度（中等症）、III度（重症）に分けられます。

I度（軽症）

めまい

立ちくらみ

筋肉のこむら返り

手足のしびれ

気分不快

II度（中等症）

頭痛

吐き気や嘔吐

体のだるさ

力が入らない

III 度（重症）

高体温

意識がない

全身のけいれん

呼びかけに反応しない

真っ直ぐに歩けない、走れない

胃腸炎

胃腸炎の症状は、急性・慢性によって大きく異なります。

急性胃腸炎の場合、ウイルスや細菌などへの感染が原因となること（感染性胃腸炎）が多く、前触れなく突然発症し、発熱、吐き気・嘔吐、下痢、腹痛、お腹の張りなどの症状を引き起こします。

症状の現れ方はさまざまですが、一般的にウイルスによるものは吐き気や嘔吐症状が強く、細菌性のは下痢や腹痛などの症状が強く現れる傾向にあります。特に腸に強い炎症を引き起こす腸管出血性大腸菌やカンピロバクターなどの細菌によるものでは、発症後に血便（血が混ざった便）が見られることがあるのも特徴の 1 つです。

腸管出血性大腸菌による急性胃腸炎は重症化すると腎臓の機能低下を引き起こす“溶血性尿毒素症候群”を発症し、命に関わることも少なくありません。なお、感染性胃腸炎は重症化すると高熱、下痢・嘔吐によって水分不足の状態に陥り、疲労感や脱力、喉の渇き、めまい、立ちくらみ、動悸などの症状を引き起こすことがあります。

慢性胃腸炎の場合には、長期的な胃やお腹の痛み・不快感のほか、食欲不振、下痢などがみられることもあります。

結膜炎

結膜炎はどのタイプでも以下のような症状がみられます。

結膜の充血

目やに

目のかゆみ

異物感

涙の分泌過多

アレルギー性結膜炎では、目のかゆみに加えて鼻汁や鼻閉など、ほかのアレルギー症状が現れることもあります。

重症なアレルギー性結膜炎として、春季しゅんきカタルという病気があり、一般的な症状のほかにもまぶたの裏に粘膜の盛り上がりができることがあります。これによって角膜が傷つき、重症な場合には角膜潰瘍かくまくかいようを現し失明に至ることもあります。一方、眼症状が重度で全身に症状が引き起こされるのは、ウイルス性結膜炎と細菌性結膜炎です。

くも膜下出血

くも膜下出血の主な症状は頭痛で、吐き気や嘔吐を伴い、意識が朦朧もうろうとする・意識を失うといった意識障害を生じることも少なくありません。脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血の場合は、意識があれば、突然“バットで殴られたような非常に強い頭痛”を生じることが特徴です。また、脳内に出血を伴った場合には手足の麻痺や言葉が出ないといった神経症状を伴います。

脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血は、発症すると 3 割近くが命を落とすとされています。また、一命をとりとめた場合でも、頭蓋骨内ずがいこつないの圧力が上昇（頭蓋内圧亢進）し続けると、脳にダメージが加わって重篤な後遺症を残すことも少なくありません。

甲状腺機能低下症

甲状腺ホルモンは、全身の新陳代謝を活性化するはたらきがあります。そのため、甲状腺機能低下症では全身の器官や精神的な活動性が低下し、身体的・精神的なさまざまな症状を引き起こします。身体的症状としてよくみられるのは、むくみ、寒がり、体重増加、脱毛、便秘、皮膚の乾燥、生理不順などが挙げられます。一方、精神的症状としては、抑うつ気分、もの忘れ、倦怠感けんたいかん、無気力感などがみられることが特徴です。また、甲状腺機能低下症は軽度な場合、ほとんど自覚症状はありません。しかし、重症化すると意識障害を引き起こす“粘液水腫性昏睡ねんえきすいしゅせいこんすい”と呼ばれる状態に進行したり、心不全など重篤な合併症を引き起こしたりすることもあるため注意が必要です。

脳出血

脳出血の症状は、脳のどの部位の血管が破れてどの程度の出血が生じたかによって大きく異なります。

血管が破れて漏れ出た血液は固まって“血腫”を形成し、脳の組織にダメージを与えます。その結果、ダメージを受けた部位の脳の機能が低下するため、筋力や感覚の低下、しびれ、ろれつが回らない、言葉が出てこない、視力や視野の異常、めまいなどの症状が頭痛や吐き気とともに現れます。また、出血量が多い場合は血腫が脳を広い範囲で圧迫して、意識障害を引き起こすほか、呼吸・循環を司る脳幹という部位がダメージを受けることで呼吸停止などが起こり、突然死の原因になることも少なくありません。

脳梗塞

脳梗塞は突然発症します。その多くは片麻痺・へんまひや感覚障害など生活に支障をきたす重大な後遺症を残すことがあり、最悪の場合には命に関わる事態になりますので、直ちに対応して後遺症を最小限にすることが極めて重要です。

そのためには初期症状を知って、直ちに緊急受診行動をとることができるようにしておくことが大切です。

発症から 1 分でも早く脳卒中の対応が可能な病院にたどり着くことが、脳卒中から助かる第一歩です。特に症状が軽い場合は、「この程度で受診しては大げさではないか？」という思いで受診行動が遅れて治療の機会を失いがちです。いざというときのために「脳卒中は『顔・腕・ことば』ですぐ受診」のポイントを覚えて、直ちに受診行動がとれるよう心がけましょう。

顔：「イーッ」と言ってもら。口の片方だけしか動かないときは異常です。

腕：両手のひらを上に向けて「前にならえ」の姿勢をとらせ、目をつぶってゆっくり 5 つ数えましょう。片側の腕が下がってくる場合は異常です。

言葉：ろれつが回っていない、言葉が理解できない、話せない場合は異常です。一人暮らしの方なら、いつも話している人に電話してみるのも役に立ちます。

顔、腕、ことばの 3 つの検査を行って、1 つでも異常がある人を脳卒中だと判断したとき、およそ 7 割当たります。

日本脳炎

主な初発症状は、発熱、頭痛、嘔吐などです。その後、意識がわるくなったり、意識変容といって、落ち着かない様子になったり、刺激に対して反応が乏しくなったりします。また、手足の震えや四肢の麻痺が現れることもあります。そのほか、話すことや飲み込むことが難しくなったり、物が二重に見えたりする（複視）こともあります。

髄膜炎

髄膜炎の症状は原因や患者の年齢、重症度などによって異なりますが、一般的には発熱、頭痛、倦怠感・けんたいかん、吐き気・嘔吐、項部硬直（首が硬くなる）などの症状が現れます。多くは発熱や倦怠感など一般的な風邪症状が現れてから 3～5 日ほどで徐々に進行していき、重症化して炎症が脳にまで波及すると意識消失やけいれん、麻痺などの神経症状を引き起こすことも少なくありません。特に細菌性髄膜炎は進行するスピードが速いことが特徴ですが、無菌性髄膜炎は神経症状がほとんど現れないケースもあります。

一方、乳幼児はどちらのタイプであっても高熱や嘔吐などの症状が現れるものの、典型的な症状が見られないことも多く、不機嫌、哺乳量減少、活気がないといった様子の変化のみが見られることがあります。

水頭症

水頭症はいずれの種類でも脳室の拡大という共通した現象が現れますが、非交通性水頭症と交通性水頭症では症状の現れ方が異なります。

非交通性水頭症

非交通性水頭症は、中脳水道狭窄症など生まれつきの病気によって発症しやすいタイプの水頭症です。乳児期は頭蓋骨を構成する骨同士が完全にくっついていないため、水頭症を発症すると脳の拡大に伴って頭囲も拡大するのが特徴です。

一方、乳児期以降で頭蓋骨の骨が完全にくっついた後に発症すると、頭囲の拡大は生じず、脳室の拡大に伴って脳圧（脳の中の圧力）が上昇し、頭痛や吐き気・嘔吐、意識障害など“頭蓋内圧亢進症状”と呼ばれる症状が現れます。

交通性水頭症

交通性水頭症は成人に多く見られるタイプの水頭症です。非交通性水頭症と同じく脳室の拡大は生じますが、脳室内の脳脊髄液の循環経路自体は正常であるため、脳圧は非交通性水頭症よりも上昇せず正常値であることが多いといわれています。そのため、頭痛や嘔吐などの症状が現れることはほとんどないとされています。

また、脳圧が正常値の水頭症を“正常圧水頭症”と呼びますが、このタイプでは歩行障害、認知機能障害、尿失禁の 3 つの特徴的な症状が現れます。高齢者に多く見られる水頭症ですが、加齢によって現れる身体的変化と症状が似ているため、発見されずにいるケースも多いと考えられています。

高血圧症

多くの場合、症状はありません。血圧が高いことで頭痛やめまい、鼻血などの症状がみられることがあります。

高血圧では、合併症に注意することが大切です。高血圧が持続すると血管が傷ついたり、血管が固くなったりして動脈硬化が引き起こされます。この動脈硬化が進行すると脳、心臓、腎臓、眼などのさまざまな臓器に障害が起こり、脳卒中や心筋梗塞といった死に至る重篤な病気の発症につながります。

また、心臓や腎臓の機能が徐々に低下して心不全や腎不全に至ると、呼吸困難や全身のむくみ、不整脈、貧血、骨の異常などを生じ、死に至ることも少なくありません。

心筋梗塞

心筋梗塞は、突然の胸の痛みや圧迫感を生じることが特徴です。

痛みの程度は非常に強く、冷や汗や吐き気・嘔吐を伴うことも少なくありません。また、痛みは胸の一部分だけでなく、左肩、左腕、顎、歯、背中、上腹部など広い範囲に響くように放散します。

なかには胸以外の部位にのみ痛みを感じることもあり、発見が遅れるケースも見られます。腹部痛で発症する心筋梗塞も多くみられ、見逃されるケースも多くみられます。また、まれですが、無症状もしくは極めて軽症の症状の人もいます。症状が軽いから軽症とは限りません。

虚血性心疾患

虚血性心疾患の症状は、胸痛や息苦しさが代表的です。運動時は特に多くの酸素を必要とするため、運動に伴い症状が現れやすいです。また血管の狭窄が強くなったり、動脈硬化性病変が不安定になったりすると、安静時にも胸痛が出るようになります。もっとも危険な急性冠症候群では胸痛が持続し、ときに意識消失をきたすこともあります。

拡張型心筋症

ごく初期の場合には自覚症状がないこともあります。しかし、病状が進行すると、倦怠感けんたいかんや動悸どうき、少しの歩行や階段の上り下りでの息切れ、むくみや食欲低下などを自覚します。そのほか、夜間就寝中に症状が悪くなる傾向があり、夜間に呼吸困難や咳などがでます。

さらに、全身の臓器障害によって、黄疸おうだん（皮膚や白目が黄色くなる）や尿量の減少といった症状が出ることもあります。心臓の中に血栓（血液の塊）が形成されてしまい、それに関連した脳梗塞を起こすこともあります。

不整脈

不整脈と言っても症状の程度は異なります。少し脈が飛ぶ程度のものがある一方、突然死を起こすものもあります。不整脈の中でもっとも多いのは、予定されていないタイミングで脈が生じる“期外収縮”です。期外収縮は危険性のない不整脈で、発生しても自覚症状が現れないことがあります。

“頻脈”や“徐脈”にはさらに細かな分類があり、原因もさまざまです。たとえば、スポーツ選手は通常よりも心拍数が遅くなることがありますが、これは病的なものではありません。重篤な不整脈としては、命に関わる危険な“心室細動”や“持続性心室頻拍”、“トルサード・ド・ポアンツ”などがあります。また、徐脈性不整脈では“完全房室ブロック”、“洞不全症候群”などがあります。

このような危険な不整脈では、脳への血流が不十分となり、失神やふらつきを起こすことがあります。また、心臓が十分量の血液を全身へと供給できなくなった結果、息切れや呼吸困難などの心不全症状を呈することもあります。さらに、心房細動では、心房内に血栓を形成することがあります。心房内の血栓は血流に乗って全身へ飛ばされる恐れがあるため、脳梗塞の発症リスクも上昇します。

狭心症

狭心症の特徴的な症状は、胸の痛みや圧迫感が引き起こされる“発作”が生じることです。特に胸の痛みは、1 か所にとどまらず、左肩、左腕、顎、歯、背中、腹部などに響くように放散することが特徴で、なかには胸の痛みを感じずに別の部位のみに痛みが生じるケースもあります。また、冷や汗や吐き気、めまいなどの症状を伴うことも少なくありません。通常、運動後に発作が生じる“労作性狭心症”では、安静にしていれば数分以内に発作が治まりますが、冠動脈がけいれんを起こすタイプの“冠攣縮性狭心症かんれんしゅくせいきょうしんしょう”では症状が 30 分近く続くことがあります。また、発作が頻回に生じる“不安定狭心症”は冠動脈が完全に閉塞してしまう前触れの症状であると考えられています。

胃潰瘍

胃潰瘍の症状は、原因や胃の壁の障害・損傷によって異なります。初期の段階でみられる典型的な自覚症状は、みぞおちの中央あたりに生じる鈍い痛みである心窩部痛しんかぶつうです。

また、潰瘍によって胃の蠕動運動ぜんどううんどうが障害されると、嚥下困難えんげこんなんや誤嚥ごえんなどの嚥下障害、胸やけ、胸痛、嘔吐、食べ物の逆流などが生じることがあります。潰瘍がさらに進行して胃壁の血管を侵食すると、出血が起こります。そのため、下血（黒色便～タール便）や、吐血の症状が出る場合があります。また、出血が長く続くことによって貧血が引き起こされる場合もあります。

痛み止め（NSAIDs）が原因で起こる胃潰瘍は、鎮痛作用の影響で自覚症状が現れず、発見が遅れる場合があります。発見が遅れると重症化することが多く、出血性病変がみられることもまれではありません。

エボラ出血熱

エボラ出血熱は、病名のとおり“出血しやすさ”が症状として現れることもありますが、必ずしも全ての感染者でそのような症状が現れるわけではありません。

一般的には、エボラウイルスに感染後 2 日から 21 日の潜伏期間を経て、突然の発熱、強い倦怠感けんたいかんや脱力感、筋肉痛、頭痛などの症状が現れます。そして、全身の発疹、下痢や嘔吐が現れ、高度な脱水状態に陥ることも少なくありません。さらに重症化すると、血小板などが減少するため出血しやすい状態となり、吐血や下血といった症状や意識障害が生じて死に至るケースも多いとされています。

そのほか、エボラ出血熱は肝臓や腎臓など多臓器にも障害を引き起こすのも特徴のひとつです。

咽頭結膜熱

咽頭結膜熱は、原因となるアデノウイルスに感染してから 5～7 日ほどの潜伏期間を経て、38～39℃の発熱とどの痛み、結膜炎を発症するのが特徴です。

通常、結膜炎は感染が生じた片方の目のみに発症しますが、1～2 日ほどでもう片方の目にもウイルスがうつって症状が現れます。この病気は結膜炎による目の充血、目の痛み、涙、まぶしさ、眼脂（目ヤニ）などの症状が強く現れ、瞼のむくみなどもひどくなりますが、3～5 日ほどで自然に回復していきます。

そのほか、症状がある期間には頭痛、食欲不振、だるさ、首のリンパ節の腫れと痛みなどの症状を伴うことも少なくありません。

かぜ

上気道(鼻やのどなど)に炎症を引き起こされ、鼻水、鼻詰まり、咳、のどの痛みといった症状が現れます。原因ウイルスによって症状が現れる頻度には差があります。子どもが感染した場合、鼻やのどといった上気道だけでなく、気管支を含めた下気道まで症状が広がりやすいウイルスもあります。

オットセイの鳴き声のような咳

たとえば、コロナウイルスやパラインフルエンザウイルスに感染すると、クループ症候群という病気が引き起こされることもあります。クループ症候群の典型的な症状は、オットセイが鳴いているように聞こえる特徴的な咳です。この咳は大吠様咳嗽けんぱいようがいそうと呼ばれます。

ゼーゼーという喘鳴ぜんめい

また、乳児が RS ウイルスや、パラインフルエンザウイルス、ヒトメタニューモウイルスに感染すると、急性気管支炎を引き起こすことがあります。急性気管支炎では、喘鳴ぜんめいと呼ばれる、ゼーゼーという呼吸音が現れます。RS ウイルスは、冬に流行するウイルスですが、その他のウイルスは RS ウイルスの流行時期と外れることもあります。そのため、1 年を通して乳児に喘鳴をきたすこととなります。肺や心臓に病気をもつ子ども、早産児、1 歳未満の子どもなどが感染すると、呼吸障害が強くなりやすいことも知られています。

インフルエンザウイルスが原因の場合は、急激な発熱、筋肉痛、倦怠感などの症状が現れます。

主な症状は鼻の症状（鼻水、鼻づまり）と喉の症状（喉の痛み）で、そのほかに発熱、頭痛、倦怠感、咳、痰などの症状が現れることがあります。

症状は病原体の感染から 1～3 日程経ってから現れることが多く、喉の痛みや鼻の不快感から始まり、鼻水やくしゃみが出るようになります。鼻水は、出始めはさらさらとしています。次第にどろどろとした黄緑色に変化することが多いです。発熱はある場合とない場合がありますが、小さな子どもは熱が出やすく、38～40℃の高熱が出ることもあります。

ただし、これらの症状の出方は個人差が大きく、いつも決まった症状が見られるとは限りません。また、これらの症状はかぜ以外の病気でも見られることがあり、治療の有無にかかわ

らず 7～10 日程度で軽快しますが、咳だけ数週間残ることもあります。自然に軽快しない場合はほかの病気を疑うこともあります。

インフルエンザ

インフルエンザは咳や鼻水を介する飛沫感染によって感染し、1～2 日程度の短い潜伏期間の後に発症します。

典型的なインフルエンザは、悪寒戦慄、急激な高熱と共に発症します。同時に、筋肉痛や咳、鼻水などの上気道の症状が現れることもあります。発熱期間は 3～5 日ほどであることが多く、38 度以上の高熱が持続した後に解熱傾向に向かいます。

一度解熱してから再度発熱する「2 峰性発熱にほうせいはつねつ」と呼ばれる熱型をとることもあります。2 峰性発熱の場合は、インフルエンザの自然経過なのか、肺炎などの合併症による発熱なのか、医療機関で正しく判断を受けることが重要です。新型インフルエンザでは、下痢や嘔吐などの消化器症状が生じることもあります。

また、肺炎や脳症などの合併症にも注意が必要です。インフルエンザウイルスの感染に合併症を発症している場合、以下の症状が現れることがあります。

発熱の期間が典型的なインフルエンザの例よりも長くなる

咳がひどくなり呼吸が苦しくなる

意識状態がおかしく、けいれんを起こす

など

重症の肺炎を発症している場合、呼吸のサポートが必要となることがあります。また、重症度が増した場合には、通常の呼吸管理が難しくなり、ECMO（体外式膜型人工肺）を用いた呼吸管理が必要になることもあります。

気管支喘息

気管支喘息の本態は、慢性的な気道粘膜の炎症ですが、常に何らかの症状が現れているわけではありません。特定のアレルゲンや呼吸器感染症、激しい運動などの外的な刺激が炎症を起こしている気道粘膜に更なる刺激を与えて気道の狭窄を引き起こすことによって「喘息発作」を生じます。最新のガイドライン（2019 年時点）で、発作ではなく急性増悪を使用することになったため、以降は発作を急性増悪と示します。喘息の急性増悪は真夜中～明け方に多く、秋に発症しやすい、季節の変わり目に生じやすいなどの特徴があります。

喘息の急性増悪はアレルゲンなどに曝露され、可逆的な気道狭窄が生じることで発症します。気道狭窄が生じた結果、呼吸性呼吸困難(息を吐きだすことが困難になる)や呼気の延長、喘鳴、咳嗽などの症状が現れます。また、更に気道狭窄が進行して高度な気道閉塞が生じることで、チアノーゼや不穏、興奮、意識障害などを引き起こします。

喘息

気管支喘息の症状としては、呼吸困難を伴う咳が挙げられます。特に、就寝後に咳や息苦しさで目が覚める、あるいは朝方に咳が出て目が覚めることが多いのも気管支喘息の特徴です。そのほか、運動した直後や笑った後などに咳が誘発されることもあります。喘息の程度が強くなると、安静時であっても咳が出たり、呼吸をするとゼーゼーと雑音を発する喘鳴を生じたりします。

重症例では気道が狭くなり、気道に喀痰かくたんが詰まるため十分な酸素を取り込むことができず、チアノーゼ（皮膚や粘膜などが青みがかった紫色になること）や意識障害が起きることもあります。体内に二酸化炭素がたまることもあります。

咳喘息と呼ばれる、咳のみが主症状である喘息が近年多くみられます。咳は出るものの呼吸機能は正常で、呼吸困難も喘鳴もなく軽い喘息といえます。しかし、咳喘息の方が気管支喘息になってしまう場合がありますし、その逆が起こることもあります。

アレルギー性結膜炎

アレルギー性結膜炎の主要症状は、眼のかゆみや充血、目がゴロゴロするといった異物感、目やにや涙の増加などです。これらは季節、通年性に共通しています。またアレルギー性結膜炎では、目がかゆくて頻繁にこすってしまうため、角膜を傷つけてしまい視力低下を起こすこともあります。

エコノミークラス症候群

特徴的な症状は、突然の胸の痛み、呼吸困難や息切れ、咳や血痰です。重症の場合は、意識障害が起きたり、ショック状態となったりする恐れがあります。放置すれば命にかかわることもあります。

まわりの方が突然苦しそうにしたり、呼吸が速くなったり、浅い呼吸が多くなったりしたときには、この病気を疑って救急車を呼ぶ必要があります。

急性胃腸炎

急性胃腸炎の症状は原因によっても異なりますが、主に一時的な吐き気や嘔吐、腹痛、下痢、血便、発熱などが挙げられます。

感染性胃腸炎の場合、感染したウイルス・細菌・寄生虫の種類に応じて潜伏期間があり、潜伏期間を過ぎた後に症状が現れることが一般的です。たとえばノロウイルスの場合、潜伏期間は12時間から2日程度といわれています。

脱水症状

嘔吐や下痢に伴って脱水症状が現れる場合があります。

脱水症状とは、体の水分量が不足することにより、口の乾きや体のだるさ、血圧の低下、意識障害など、さまざまな症状が現れることです。症状が現れる前に、速やかに経口補水液な

どで水分補給を行うことが大切です。

特に子どもの場合、必要とされる水分の割合が大人と比較して多いことなどもあり、少しの嘔吐や下痢でも脱水症状を引き起こしやすいといわれています。泣いても涙の量が少ない、口の中がベタついている、尿の量が減っているなどの特徴があれば、脱水症状が生じている可能性があります。

食道炎

食道炎では、主に以下のような症状が現れます。

胸部の痛み

飲み込みにくさ（嚥下障害）

胸やけ

吞酸

などが挙げられます。

特に、胃食道逆流症（GERD）によって起こる食道炎では、胸やけや吞酸といった症状を訴える方が少なくありません。また、そのほかにも、声のかすれや慢性の咳、睡眠障害などの症状が現れることもあります。

低カリウム血症

軽度の低カリウム血症では、症状が現れることはほとんどありません。血液中のカリウム濃度が 3.0mEq/L 未満の重度になると、脱力感、手足のだるさ、筋肉痛、筋力低下、こわばり、麻痺、不整脈などの症状がみられます。症状が進行すると、歩行不能や起立不能、呼吸困難、褐色尿、多尿などが生じることもあります。

なお、心疾患がある人や心疾患の治療薬であるジゴキシンを使用している人は、軽度の低カリウム血症でも不整脈が起こることもあるといわれています。

低ナトリウム血症

低ナトリウム血症の症状は、ナトリウム減少の程度と減少のスピードによって異なります。程度が軽い場合は無症状なことが多く、まず軽い疲労感がみられはじめます。さらにナトリウムが減ると頭痛、嘔吐、食欲不振、精神症状がみられるようになり、重症になると昏睡やけいれんが起こり、早急な対処が必要になります。

また、低ナトリウム血症の原因によっては、原因疾患による症状がみられることがあります。たとえば、心不全、肝硬変、腎疾患などの病気では細胞外液量が増加するためむくみがみられます。

ウイルス性胃腸炎

ウイルス性胃腸炎は原因ウイルスが多岐に渡り、ウイルスによって症状の現れ方が異なる

側面があります。生じる可能性のある症状としては、吐き気や嘔吐、下痢などといった消化器に関連したものが挙げられます。ロタウイルスの場合は特に、便が白っぽくなる、黄色っぽくなる、といった変化が生じることもあります。

ウイルス性胃腸炎では水分が喪失され、食欲低下からうまく水分摂取をできないこともあります。その結果として脱水が進行して、倦怠感や尿量低下、ぼーっとするなどの症状がみられることもあります

そのほか、ウイルスによっては特徴的な症状が現れることもあります。たとえば、ロタウイルスが小さなお子さんに感染した場合、けいれんを発症することもあります。また、ウイルス性胃腸炎が治癒した後、ミルクに含まれる乳糖の消化がうまく行えなくなってしまうことがあります、下痢が長引くこともあります。

神経痛

坐骨神経痛、三叉神経痛、肋間神経痛など多くの神経痛がありますが、症状としては、ぴりぴりとした痛み、じんじんとした痛み、電気が走るような痛み、などさまざまな表現がなされます。

痛みが突発的に生じることもあれば、ある姿勢をとったときや歩行を続けることで痛みが増強したりするなど、神経痛発症の誘因が存在することもあります。また、痛みが付随して、しびれや感覚異常を自覚することもあります

神経痛では、原因疾患に応じた特徴的な症状が随伴することもあります。たとえば、腰部椎間板ヘルニアや腰部脊柱管狭窄症などに関連した坐骨神経痛の場合、足の痛みが強くなり歩行に支障が生じることもあります。また、水痘帯状疱疹ウイルスに関連した神経痛の場合には、痛みの発症に前後して水ぶくれが生じることもあります。

アナフィラキシーショック

アナフィラキシーショックを起こすと、全身各所にさまざまな症状が現れます。全身にじんましんが生じたり、咳や喘鳴ぜんめいが生じたりします。喉頭粘膜が腫れ空気の通りが悪くなることから、呼吸困難による窒息が生じることもあります。消化器症状として、吐き気や嘔吐、下痢、腹痛が生じることもあります。

さらに、全身の血圧や意識状態も低下し、短時間のうちに死に至ることもあります。

原因となる物質に曝露されてからアナフィラキシーショックに至るまでの時間は、原因物質によって異なります。注射薬やハチ毒によるアナフィラキシーショックの経過は特に早い傾向があり、原因薬剤を注射されたり蜂に刺されたりしてから数分の経過で心停止に至ることもあります。

自己免疫疾患

自己免疫疾患の症状は、病気の種類によって大きく異なります。

免疫の異常によって攻撃された体の一部はダメージを受けるため、炎症や機能の異常が生じます。具体的には、関節リウマチでは関節内の組織がダメージを受けるため関節の痛みや熱感、こわばりなどが生じ、バセドウ病では甲状腺が過剰に刺激されることで甲状腺ホルモンの過剰分泌が生じます。

ダメージを受ける部位や臓器は病気によって異なりますが、全身の血管に炎症を引き起すタイプの自己免疫疾患では腎臓などさまざまな臓器にダメージが生じて命に関わるケースもあります。

尿管結石症

尿管結石では、腎臓で発生した結石が尿管へ移動し、尿の通り道を塞ふさいでしまうことにより、腰や背中、脇腹、下腹部などに激しい痛みが生じることがあります。このような痛みの発作を“疝痛せんつう発作”といいます。疝痛発作は朝方や就寝中に起こりやすく、痛みとともに吐き気や嘔吐を伴う方もいます。そのほか、結石が尿管の粘膜と擦れることによって、血尿が生じることもあります。

結石が尿管から膀胱へ落ちていく過程で疝痛発作は生じなくなり、その代わりに下腹部の痛みや頻尿・残尿感が現れることがあります。結石が完全に膀胱に落ちると、これらの症状も消失することが一般的です。

尿路結石

結石が小さい場合には、無症状のこともあります。しかし、結石によって尿の流れる道が閉塞へいそくしてしまうと背中やわき腹、下腹部に痛みが起きます。痛みの持続時間は2～3時間のことが多く、痛みの強さに波があるのが特徴です。結石の刺激で血尿が起きることもあります。感染を伴う場合には発熱があることや、痛みとともに吐き気を自覚する場合もあります。

下部尿路結石の場合、これらに加えて膀胱が刺激されることによる頻尿や残尿感がみられることもあります。

萎縮性胃炎

萎縮性胃炎には特徴的な症状はありません。そのため、症状のみでは萎縮性胃炎だと断定することはできませんが、チクチクとした胃の痛み、腹部の膨満感、胃が重く感じられるなどの症状を自覚する方もいます。

萎縮性胃炎の主要な原因であるピロリ菌の治療をすると、それまで感じていた胃の不快症状（食欲不振や胃もたれ感など）が改善することがあります。

胃食道逆流症

胃食道逆流症は胃の内容物が食道に逆流する病気ですが、症状などから 3 つのパターンに分けられます。

胃酸は非常に刺激が強いため、胃酸を含む胃内容物が逆流することで食道の粘膜にダメージが生じることがあります。このようなタイプの胃食道逆流症を“逆流性食道炎”と呼びますが、自覚症状がなく健診の内視鏡検査などで偶然発見されるケースも少なくありません。一方で、食道に炎症が生じることが原因で胸やけ、吐き気、前胸部痛、吞酸（すっぱいものが上がってくる）などの症状が現れることもあります。また、夜間は特に逆流が生じやすく、重症な場合には慢性的に喉の辺りまで胃酸が逆流することで喉の痛みや違和感、咳、声のかすれなどの症状が生じます。

また、胃食道逆流症には食道の粘膜に炎症がないものの、上述したような自覚症状のみが現れるタイプもあります。このようなタイプの胃食道逆流症は“非びらん性胃食道逆流症”と呼ばれています。

アセトン血性嘔吐症

アセトン血性嘔吐症の症状は、吐き気や顔色不良など前兆の後に、数時間から数日持続する激しい嘔吐が特徴的です。嘔吐症状は噴水様になることも多く、胆汁や血液が少量混入することもあります。嘔吐をした後にも吐き気は持続します。

その他の消化管症状として、胃のむかつき、食欲不振、腹痛などもともなうことがあります。さらに自律神経症状として発汗や低体温、下痢、頭痛などを認めることもあります。アセトン血性嘔吐症では、一度症状が治まった後も時間をあけて反復することも特徴です。

発作症状毎の間隔は、数日のこともあれば数か月のこともあります。人によって症状の出方は異なるのですが、個人個人を見ると、症状が出たきっかけ、嘔吐症状の強さ・持続時間などは、比較的似ることが多いです。

胃十二指腸潰瘍

胃十二指腸潰瘍では、腹痛を生じることがあります。胃潰瘍では食後に、十二指腸潰瘍では空腹時に、それぞれ痛みが増強しやすいという特徴があります。

また、潰瘍が形成されると、潰瘍のある場所から出血することがあります。出血の程度がひどい場合には、タール便（黒色便）として便の変化がみられることがあります。そのほかにも、貧血を起こしたり、疲れやすさや顔色不良などがみられたりすることもあります。

エイズ

エイズの原因ウイルスであるヒト免疫不全ウイルスに感染すると、2～4 週間後に発熱・頭痛などインフルエンザのような症状が現れることがあります。ただし、無症状で経過することもあるほか、症状が現れても風邪と勘違いされてしまうことも少なくありません。

発熱・頭痛などの症状が落ち着くと、その後数年は無症候期となり、特に症状が現れないことが特徴です。数年～10 年ほど経過した後の一部のリンパ球が激減することによって、エイズを発症し、著しい免疫機能の低下などが生じます。

エイズを発症すると、クリプトコッカスやニューモシスチスなど、通常の免疫力があれば体に害を及ぼさないような真菌（カビ）などに感染して、重症な肺炎などの感染症を引き起こす“日和見感染症”を発症するようになります。また、子宮頸けいがんやカポジ肉腫、リンパ腫など特定のがんの発症率が上昇するほか、食欲低下・下痢などの症状が現れるようになることで著しい衰弱状態に陥ることもあります。

そして、最終的には脳症を発症すると考えられていますが、現在では脳症にまで進行するケースは少ないのが現状です。一方で、ヒト免疫不全ウイルスに感染することによって軽度な認知機能の低下を引き起こすケースが多くなっていることが分かっています。

円錐角膜

円錐角膜では角膜の変形による乱視や視力低下が主な症状になります。円錐角膜における乱視は、眼鏡では補正できません。

また角膜の突出が強くなると、角膜を構成する 5 層の中でもデスメ膜が破裂することがあります。デスメ膜が破裂すると角膜内に水が溜まり、角膜が突然白く濁る急性水腫を発症、著しい視力低下を起こすことがあります。

・肺アスペルギルス症

肺アスペルギルス症では、呼吸器の症状が主体となります。たとえば、咳や痰、血痰、喘鳴（呼吸の際にゼーゼーという音が聴こえる）、胸の痛み、息苦しさなどです。

急激な経過で呼吸困難に至ることもあります。その一方で慢性的に病気が進行して徐々に呼吸障害が悪化していくこともあります。また、発熱や全身のだるさ、食欲不振などの全身症状がみられることもあります。

・肺炎

症状は多彩ですが、発熱、咳、膿性痰が主な症状です。肺から胸膜まで炎症が広がることにより胸痛が生じる場合もあります。

重症になると呼吸が困難になったり、意識が悪くなったりすることがあります。また病原体によっては、筋肉痛や腹痛・下痢といった一見肺炎とは関連がなさそうな症状が出たり、高齢者では典型的な症状が目立たず、食欲低下や全身倦怠感などが主な症状となったりする場合がありますため注意が必要です。

非定型肺炎は、頑固な咳がある、痰がない、基礎疾患がないあるいは軽い、年齢が若い、血液検査で白血球数が上がらないなどが特徴とされています。肺炎が治った後も、咳はしばらく続く場合があります。これを感染後咳嗽といいます。

・肺炎球菌感染症

肺炎球菌感染症の症状は、感染部位によって異なります。代表的な肺炎球菌感染症の症状には、以下のものがあります。

中耳炎……耳の痛み、耳だれ、難聴、発熱など

副鼻腔炎……鼻からの膿、顔の圧迫感や痛み、鼻づまり、嗅覚の低下など

肺炎……咳、痰、発熱、息苦しさ、呼吸が早くなる、食欲の低下など

敗血症……発熱、血圧低下、播種性血管内凝固症候群はしゅせいけっかんないぎょうこしょうこうぐん（出血、血栓など）、多臓器不全など

髄膜炎……発熱、頭痛、意識障害、項部硬直（首が曲げられなくなる）、けいれんなど

・肺炎クラミジア感染症

クラミジアニューモニエもしくはクラミジアトラコマチスによる肺炎は、感染から 1 か月ほどして発症します。咳や鼻水、痰、声枯れなどの症状が現れます。

新生児や乳児に発症した際には、活気不良や機嫌の悪さ、哺乳力の低下といった症状が前面に出ることもあります。また、クラミジアトラコマチスは、新生児に結膜炎を引き起こすこともあり、涙目や充血、目やになどの症状を伴うこともあります。

・肺炎（こども）

子どもの場合でも、発熱に加えて、鼻水・咳・多呼吸などの一般的な呼吸器に関連した症状が現れます。しかし、食欲低下・胸痛・腹痛・嘔吐など、肺と関係のなさそうな症状が現れる場合もあります。

年齢や病原体の種類によって、症状が若干異なることもあります。たとえば、乳児期早期に発症するクラミジア関連の肺炎においては、必ずしも熱がでるわけではありません。また、咳そのものがとても激しく、呼吸がとても早くなる傾向にあります。そのほか、マイコプラズマ肺炎においては、肺炎以外に種々の合併症を生じることもあり、それら合併症に関連した症状が全面に出ることもあります。具体的には髄膜炎ずいまくえん（頭痛や嘔吐）、ギランバレー症候群（手足の麻痺まひ）、発疹などです。

・肺化膿症

肺化膿症を発症すると、発熱や痰、咳などの症状が現れます。膿が生じる部位によっては、胸痛が生じることもあります。原因菌によって発症経過は異なりますが、数週間の経過でゆっくりと進行することもあるれば、数日の間に呼吸障害が強くなることもあります。高齢者や寝たきりの方に生じることも多いため、明らかな呼吸器症状がわかりにくいこともあります。そのため、誤嚥性肺炎や肺化膿症を起こしていても激しい症状を示さず、何となく元気がない、体重が減ってきたなどといった程度のことも少なくはありません。高齢者や寝たきりの方では、自身の体調不良をはっきりと説明できないこともあるので、周囲の方がこうした症状に注意してあげることも大切です。

・肺外結核

肺結核の症状としては頑固な咳や痰、血痰などが有名ですが、肺外結核ではこれといった特徴的な症状がなく、微熱や軽い倦怠感など、はっきりしない症状が多いです。肺外結核のなかで最も頻度の高い結核性胸膜炎では、比較的急激に発症する胸痛がみられることもあります。また、「胸水」という液体が肺の周りに貯まってくるために咳が出たり呼吸が苦しくなったりすることがあります。ただし、同じように発熱と胸痛を呈する病気である「細菌性胸膜炎・膿胸」と結核性胸膜炎を症状のみで区別することは難しく、後述するような検査を行って診断を進めていく必要があります。この他、結核性髄膜炎では髄膜が刺激されることで生じる頭痛、嘔気、嘔吐などの症状がみられることがありますし、脊椎結核では腰痛や下肢のしびれ・筋力低下、腸結核では下痢や軟便、腹痛、腹部膨満などの症状がそれぞれみられることがあります。

・肺がん

肺がんは発症した部位や進行度によって症状が大きく異なります。近年は喫煙習慣のない方を中心に、気管支の末梢まっしょうにできるがんが増えています。一方、喫煙を原因として肺がんが生じた場合は、太い気管支の周囲にがんが発生することが多いといわれています。いずれの場合も肺自体には痛みを感じないため、早期の段階では自覚症状を認めないことが多くあります。進行すると次第に慢性的な咳、痰、胸の痛み、だるさ、体重減少などの症状が現れます。

・肺気腫

肺胞は、肺の中のブドウ状に密生した細かい袋状の構造をしています。呼吸の際の酸素と二酸化炭素のガス交換の場であり、息を吸うことで取り入れられた酸素が血液に乗って全身に運ばれていき、息を吐くことで血液中の二酸化炭素が出されます。肺気腫では肺胞でのガスの交換が正常に行われなくなり、さらに肺胞の構造が破壊される

ことで弾力性が失われ、呼吸によって取り込んだ空気を吐き出しにくくなります。その結果、体を動かすと息苦しさを覚えるようになり、咳や痰も出やすくなります。心臓にも負担がかかるようになるため、進行すれば心不全を併発するケース（肺性心）も多いとされています。さらに、肺の中に空気が残りやすくなることで胸がビール樽のように見えたり、血中の酸素濃度が慢性的に低下することでチアノーゼがみられたりと、“見た目”の変化が現れることも少なくありません。

また、活動性が低下するため、体重あるいは筋肉量の減少（サルコペニア）やフレイルの状態が引き起こされ、肺炎などの感染症にかかるリスクも高くなります。

・肺吸虫症

肺吸虫症では、肺吸虫の寄生先臓器に関連した症状を引き起こします。

その名前から推察される通り肺に寄生することが多いため、慢性的な咳や血痰、胸痛、呼吸困難、発熱といった肺炎症状を呈します。胸水の貯留や、気胸をみることもあります。こうした合併症があると、呼吸困難や胸痛は増強されます。肺吸虫症に関連した肺症状は、肺結核にも類似しています。

肺吸虫は肺以外の組織にも侵入しうることが知られており、ターゲットとなった臓器に関連した症状が引き起こされます。特に脳に侵入した際は重篤になりやすく、頭痛や視力障害、けいれんなどの合併症を引き起こすことになります。

・肺結核

発症初期には無症状のことも多いですが、症状が現れる場合は微熱、咳、喀痰がみられることが一般的です。さらに全身倦怠感、胸痛、血痰、呼吸困難、食欲不振などの症状を伴うこともあります。結核の症状はかぜと似たものが多く、症状が目立ちにくいことが多いために、健康診断の胸部X線検査で初めて発見されることもあります。

発見が遅れて進行した場合には肺が破壊され、ほかの菌が感染することで肺炎を繰り返し発症したり、後遺症によって呼吸不全を生じたりする例があります

・敗血症

敗血症は全身にさまざまな症状が現れるのが特徴であり、下痢・嘔吐、頭痛、呼吸困難感、咳といった原因となる感染症に特有の症状とともに、異常な体温上昇・低下、悪寒、ふるえ、手足の冷え、心拍数の上昇、呼吸数の増加などが生じ、自分がいる場所や時間が分からなくなる“見当識障害”といった意識低下、錯乱などの精神症状が現れるケースも少なくありません。

また、敗血症は状態が悪化しやすいのも特徴であり、血圧の低下や尿量の減少、呼吸困難などの重篤な症状が見られるようになります。さらに、上述したように敗血症では臓器の血流が低下することで機能が損なわれ、進行すると臓器の組織壊死そしきえし（組織の腐敗）が

引き起こされます。

・肺高血圧症

体を動かしたときに息切れや疲れやすさなどの症状が生じるようになります。また、進行すると呼吸困難、動悸、胸の痛み、失神、むくみなどの症状があらわれます。

・肺好酸球性肉芽腫症

肺好酸球性肉芽腫症は、無症状の状況で発見されることも多いですが、発熱や体重減少、全身倦怠感などの症状から病気が発見されることもあります。

また、肺好酸球性肉芽腫症の病変は肺に生じるため、呼吸器症状が前面に出ることもあります。具体的には、慢性的な咳や、息苦しさが挙げられます。その他、気胸も生じやすく、それに関連した胸の痛みが出現することもあります。

肺好酸球性肉芽腫症では、合併症に関連した症状が出現することもあります。たとえば、肺高血圧の合併により、進行性に呼吸機能が低下して非常に強い呼吸困難を呈することがあります。また、ホジキン病などの腫瘍性疾患を合併したり、尿崩症（大量の尿がみられる疾患）や病的骨折（軽微な外力で骨が折れる状態）を生じたりすることがあります。

・胚細胞腫瘍

胚細胞腫瘍の症状は発生した部位によって大きく異なります。

精巣や卵巣に発生した場合は、それらの臓器に腫れが生じます。精巣の場合は痛みを伴わない睾丸の腫れやしこりが見られるため比較的早く発見することが可能ですが、卵巣は体の深くに位置するため症状が現れにくく、発見が遅れてしまうことも珍しくありません。しかし、進行すると下腹部痛や下腹部のしこりが生じるとされています。

一方で、性腺外原発の胚細胞腫瘍は体の中心部に発症しやすいのが特徴であり、縦隔じゅうかく（左右の肺に挟まれた空間）や仙骨部（お尻の辺り）、脳の中心部などに多く発生します。

縦隔に発生した場合は胸の痛み・咳・息切れなどを引き起こし、仙骨部に発生した場合はお尻にしこりが生じるほか、周囲を走行する排便・排尿を司る神経にダメージを与えて排便や排尿の異常を引き起こすことも少なくありません。

また、脳に発生した場合は、頭痛や嘔吐など頭蓋内圧上昇に伴う症状のほか、ホルモンの産生を生じる下垂体に発生したケースでは、視野の異常、ホルモン分泌異常による成長障害や食欲低下などを引き起こします。

・肺水腫

肺水腫の状態に至ると、肺に水分がたまることで肺の機能低下が生じます。

肺は、体に必要な酸素を取り入れて、酸素を消費して作られた二酸化炭素を排出する臓器で

す。そのため、肺水腫によって肺の機能が低下すると十分な酸素が取り込めなくなるため息苦しさを自覚するようになります。息苦しさは横になると悪化するのが特徴で、ゼイゼイという喘鳴やピンク色の泡沫状の痰がみられることもあります。

また、重症な場合には体内の酸素が大幅に不足し、皮膚や唇が紫色になる“チアノーゼ”や冷や汗、血圧低下などの症状が現れ、進行すると救命が困難になることも少なくありません。また、肺水腫は心不全や肺炎などの病気によって引き起こされるため、肺水腫自体の症状だけでなく、全身のむくみや発熱など原因となる病気によってさまざまな症状が現れます。

・肺腺がん

肺腺癌で生じるがんは、肺の中でも末梢側まっしょうがわに生じることが多いです。このことと関連して、肺腺癌の初期段階では自覚症状が生じにくいといわれています。

そのため、自覚症状がないまま、検診や別の理由で撮影されたレントゲン写真をきっかけとして病気の診断に至ることがあります。

咳や痰など肺がんでみられる症状は現れにくいですが、胸壁に近い末梢部位に発症しやすいという特徴から、胸水（胸腔に溜まる液体）が溜まり息切れを起こすことがあります。

・肺動脈狭窄

肺動脈狭窄は、右心室から肺への血流が流れにくくなっている状態です。狭窄の程度が強い場合には、肺への血流が乏しくなるため、低酸素血症を反映したチアノーゼ（皮膚や粘膜が青紫色である状態）を生後早期にみることもあります。

狭窄の程度があまり強くなく肺への血流がある程度保たれている場合であっても、右心室には常時負担がかかることになります。時間経過と共に右心室への圧負担が蓄積され、右心不全の症状が出現するようになります。具体的には、全身の浮腫（ふしゅ：むくみ）、肝臓の腫大、胸水、腹水、それらによる呼吸困難や腹部膨満などです。

その一方、肺動脈狭窄の程度が軽度の場合、明らかな症状を呈さずに成人期まで経過することもあります。聴診をすると狭い部位を血流が流れているために心雑音が聴取され、偶然発見されることがあります。

・肺動脈性肺高血圧症

肺動脈性肺高血圧症では、右心室に負担がかかり、血液がうまく肺に流れなくなってしまいます。また、肺は血液に酸素を供給するために重要な臓器ですが、このはたらきも阻害されてしまいます。

それによって、全身に酸素が不十分な血液が滞りどこおるため、疲れやすさを感じるようになり、階段を上ったり歩いたりすると疲れを自覚することがあります。また、脳にも不十分な血液が供給されることになり、立ちくらみやめまいを感じます。血液が全身に溜まることで、足を中心としたむくみを自覚することもあります。

病気の状態が進行すると、運動をしていなくても呼吸困難を自覚するようになります。横になった際に症状が悪化するため、座った姿勢を好むようになり、このことを起座呼吸ぎこきゅうと呼びます。

むくみは全身に広がり、かすれ声（声帯のむくみ）、ピンク色の痰たんや咳、喘鳴ぜんめい（ゼーゼーとした呼吸）などの症状を認め、慢性的な呼吸困難を自覚します。

・排尿障害

排尿障害の症状は多岐にわたりますが、代表的なものとして、蓄尿障害では頻尿や尿失禁、排出障害では残尿感や排尿後尿滴下などがあります。具体的には以下のような症状がみられます。

朝起きてから寝るまでに 8 回以上排尿する（昼間頻尿）

就寝中、排尿のために 1 回以上起床する（夜間頻尿）

抑えきれない強い尿意が突然起こる（尿意切迫感）

尿意が強いため、我慢できずに尿が漏れてしまう（切迫性尿失禁）

重い物を持ち上げたときや、咳・くしゃみをしたときに尿が漏れる（腹圧性尿失禁）

尿の勢いが弱い、尿が途切れる

排尿しても膀胱内に尿が残っている感じがする（残尿感）

自分の意思とは関係なく排尿直後に尿が少し漏れる（排尿後尿滴下）

・排便障害

便失禁や便秘などの症状が現れます。トイレまで排便を我慢することができず、トイレに行く前に便が漏れてしまうことがあります。便をすべて出し切ることができない、数日間排便がないなどの症状がみられます。また、一回あたりの排便量が充分ではなく、頻回にトイレに行かざるを得ないこともあります。

排便障害では、その基礎疾患に関連した症状がみられることもあります。たとえば、大腸がんが原因の場合には、血便や体重減少、全身倦怠感、便が細くなるなどの症状が現れることがあります。

直腸脱や痔瘻、痔核などでは、肛門周囲に腫瘍しゅりゅうができる、肛門周囲に痛みを伴う腫れ物が形成される、トイレトペーパーに血が付着する、などの症状につながることもあります。

・白癬

白癬は菌が感染する部位によって、また個人の免疫や局所の皮膚の状態によって症状が大きく異なり多彩です。

白癬の中でもっとも患者数が多いのは足白癬（いわゆる水虫）で、国民の 4 人に 1 人が足白癬であろうと推測されています。趾あしゆびの間、足の裏、かかとなどに感染し、発赤、

小さな水疱すいほうや角質の剥がれ、びらんが現れます。

かゆさはさまざまに悪くなる時に強いかゆみを伴う一方、まったくかゆみがない場合もあります。手にも同様に手白癬が生じることがあります。四肢から体幹、顔面に発症するのは体部白癬（いわゆるたむし）、股を中心に生じたものは股部白癬（いわゆるいんきんたむし）といいますが、赤い皮疹が輪になって周囲に広がり、真ん中はしばらくすると少し治ってくる場合があります。これらはいずれも強いかゆみがあります。

頭の白癬（いわゆるしらくも）はあまりかゆみがなく、フケが出たりその部分の脱毛が生じたりします。頭では時に急に膿んできて強い痛みが出たり、頭頸部のリンパ腺が腫れて痛んだりすることがあります。

そのほか、足や手白癬から爪に広がって爪白癬になる場合があります。超高齢化の進行で爪白癬の増加が懸念されています。

爪白癬では爪が白色や黄色に濁って見えるようになります。爪白癬が進行すると、爪の厚みが増し、ぼろぼろになって崩壊していきます。爪が分厚くなると靴などに押されて痛みが出ることがあります。

・白内障

白内障発症時の目の見え方は、患者の水晶体の濁り方によって異なります。水晶体全体に混濁がある場合には、視界全体がぼやける、かすむといった症状が認められます。

水晶体の中心のみに混濁が認められる場合は、水晶体の屈折力が強くなるため、近くが見やすくなります。一時的に老眼が治ったように感じるのが特徴ですが、進行すると近くも遠くも見えにくくなります。水晶体の一番奥の中心が濁るタイプはステロイド内服で生じやすく、比較的短期間に視力低下が進行します。いずれのタイプも混濁により眼球内で光が散乱してしまうため、明るい場所にいる場合や逆光になった場合にまぶしさを感じて対象物が見えにくくなります。また、対象物が二重に見えてしまうこともあります。夜間の運転など暗いところでものが見えにくいのも白内障でよくある症状です。

・剥離骨折

骨折部位に一致した痛みや腫れ、皮下出血などを認めます。はがれた骨がもともとあった場所からずれてしまうこともあります。骨折部位によっては感覚障害や歩行困難をきたすこともあります。

剥離骨折は骨に突然の外力が加わることで生じるため、踵かかとや骨盤こつばん、肘、膝など強靱きょうじんな筋肉や腱、靱帯が存在する部位で生じることがあります。

・破傷風

破傷風の症状は、全身の筋肉にけいれんが生じる“全身性破傷風”が典型的です。感染してから通常 3 週間までの潜伏期間を経て、徐々に全身の筋肉に影響が現れます。症状が現れる

筋肉・時期に応じて第1期から第4期に分類することができます。

第1期

口が開けにくいことが破傷風の初発症状であることが多く、“開口障害”と呼びます。首筋の張り、寝汗、歯ぎしりなどの症状も現れます。

第2期

開口障害は徐々に強くなり、顔の筋肉がいつもけいれんし、皮肉笑いをしているような顔になります。この症状を瘻笑けいしょうと呼びます。また、このような顔貌は破傷風顔貌と呼ばれます。

第3期

顔面の筋肉のみならず、首から背中、全身の筋肉に毒素の影響がみられるようになります。その結果、弓を置いたように後頭部と踵かかとしか地面についていないような体勢となります。この姿勢のことを“後弓反張こうきゅうはんちょう”と呼びます。

さらに、発作的にけいれんをきたす時期でもあります。突然、手足が強く固まり、全身の筋肉が固くなって身動きがとれなくなる発作を繰り返します。数秒から数分で元に戻りますが、病状の進行とともに時間が長くなっていきます。この発作は光や音、振動といった刺激で誘発されます。

第4期

これまでにみられた症状が徐々に回復する時期です。第1期から第3期までの時間経過が短い（48時間以内）ほど、経過は悪いといわれています。

・白血病

白血病の症状は病気のタイプによって差はありますが、一般的には正常な白血球の産生が阻害されることで、発熱などの感染症症状が出やすくなります。また、骨髄が白血病細胞によって占拠されることで、赤血球や血小板の産生に支障を生じ、貧血や出血しやすくなるといった症状が現れるようになります。

進行すると、白血病細胞が全身の臓器に行き渡ること、肝臓や脾臓ひぞうの腫れ、歯茎の腫れ、骨の痛みなどが現れることもあります。さらに白血病細胞が脳や脊髄せきずいを包む髄膜にまで及ぶと、頭痛や吐き気などの症状が引き起こされることも少なくありません。そのほかリンパ系幹細胞に由来する白血病では、リンパ節や胸腺などの腫れが見られることもあります。

一般的に、急速に発症して進展するタイプの“急性白血病”は重篤な症状が現れやすいですが、ゆっくりと進行するタイプの“慢性白血病”は初期段階では自覚症状がほとんど現れず、健康診断などで偶然発見されるケースも少なくありません。しかし、発症から数年ほどで急速に症状が悪化する場合もあるので注意が必要です。

・鼻副鼻腔腫瘍

腫瘍ができることによって空気の通り道が障害され、鼻詰まりのような症状が現れることがあります。また、腫瘍から出血し鼻血がでることもあります。そのほかにも、悪臭を伴う鼻水がでることがあります。

さらに、腫瘍が周囲の構造物を圧迫することから、歯の痛みや顔面の圧迫感・痛みが出ることがあります。

また、眼球が圧迫されることから眼球突出や複視（ものが二重に見えること）、脳に病変が浸潤しんじゅん（広がること）して神経症状が現れることもあります。脳への浸潤がきっかけで、中枢神経系への感染症を発症することもあります。

・梅毒

梅毒は、発症してから経時的にさまざまな症状が現れるのが大きな特徴の病気です。梅毒の病気の進行は3段階に表され、時間の経過に伴い症状が徐々に進行していきます。また、症状が現れたり、自然に消えたりを繰り返すこともあります。

第Ⅰ期梅毒（感染から約3週間）

梅毒トレポネーマに感染してから3週間ほどの潜伏期間を経て、感染が生じた粘膜や皮膚に“初期硬結”や“硬性下疳”と呼ばれる硬いイボのような皮疹が生じます。多くは外陰部の目につきにくい部位にでき、通常は痛みやかゆみなどを伴わないため発症に気付かないケースも多いとされています。梅毒は偽装の達人とも呼ばれ、初期の段階では他の病気と間違われることも多い病気です。また、脚の付け根のリンパ節などが腫れることもあります。痛みがないことも多く、特に治療をしなくても2～3週間で症状が消えてしまいます。

第Ⅱ期梅毒（感染から数か月）

第Ⅰ期梅毒の症状が改善して4～10週間ほど経過した後に、粘膜や皮膚から体内に侵入した梅毒トレポネーマが血液によって全身に運ばれることで、外陰部を中心として全身に皮疹や脱毛などの皮膚症状が現れるようになります。

特徴的な症状は手のひらや足のひら、全身に現れる発疹です。これらの症状も痛みやかゆみを伴わないことが多く、治療をしなくても数週間～数ヶ月で症状が治まってしまいます。

また、発熱や倦怠感などの全身症状を伴うことも多く、中には髄膜炎などの重篤な合併症を引き起こすケースも多々あります。しかし、数週間～数か月で自然に治っていくため、医療設備が脆弱でいじょうな発展途上国などでは明確な診断が下されないケースも少なくありません。

感染から1年未満のⅠ期とⅡ期では梅毒の感染力が高い時期です。性的接触による感染力が強く、症状が現れていない時期（潜伏期）でも気付かず誰かに感染を広める可能性もあります。検査をしないと梅毒に感染したかどうか分かりません。症状の現れ方には個人差があるため、気になることがある場合には検査を受けることが大切です。

第Ⅲ期梅毒（感染から数年～数十年）

第Ⅱ期の症状が治まると、数年～数十年は何も症状がない状態が続きます。多くはそのま

ま梅毒トレポネーマが体内に“潜伏”した状態で一生を終えますが、約 30%では再び症状が現れることがあります。治療をしないでいると、無症状のまま症状が進行し、やがて心血管や神経にも異常が現れるようになります。

・バセドウ病

バセドウ病を発症すると甲状腺ホルモンの過剰分泌が引き起こされます。甲状腺ホルモンは全身の臓器に作用して新陳代謝を促す作用があります。また、バセドウ病は自律神経の一種である交感神経のはたらきを活性化するかテコールアミンの分泌量も過剰になることが知られています。

その結果、動悸・体重減少・手の震え・過剰な発汗・下痢などの身体的症状、イライラ感・不眠・落ち着きのなさ・疲労感などといった精神的症状が見られるようになります。

また、過度に刺激されることによって甲状腺は大きく腫れ、喉の違和感を自覚することも少なくありません。さらに、目を動かす筋肉や脂肪に炎症を引き起こすことで腫れを生じ、目が内側から押し出されるように見える“眼球突出”が現れるのもバセドウ病の典型的な症状の1つです。悪化するとまぶたや結膜に充血・目の動きの異常、ドライアイなどを引き起こします。

さらに、バセドウ病は適切な治療をしないままの状態が続くと、心臓に過度な負担がかかって不整脈を引き起こしたり、心不全に至ったりするケースも少なくありません。また、骨の代謝が活発になることで骨が脆くなり、些細な刺激で骨折しやすくなる可能性があります。

・パーキンソン病

パーキンソン病の症状には、大きく分けると運動症状と非運動症状があります。特に運動症状はパーキンソン病に特徴的な症状で、パーキンソン病を診断する際に必ず確かめられるものです。

運動症状

主な運動症状に、ふるえ（振戦）、筋強剛きんきょうごう、動作緩慢、姿勢反射障害があります。

ふるえ

静止時振戦とも呼ばれ、椅子に座って手を膝に置いているときなど、じっとしている際に手足がふるえる症状が見られます。

筋強剛

肩、膝、指などの筋肉が固くなって、スムーズに動かしづらくなります。自分ではあまり感じず、他人に手足や頭部を動かされたときに抵抗を感じることもあります。

動作緩慢

動きが遅くなり、細かい動作がしにくくなります。歩くときに足が出にくくなる“すくみ足”と呼ばれる症状が見られることもあります。

姿勢反射障害

体のバランスが取りづらくなり、転びやすくなります。この症状はパーキンソン病を発症して数年経ってから起こることが多く、発症後早期に現れるときはほかの病気を疑います。

非運動症状

運動症状以外に、自律神経症状、認知障害、嗅覚障害、睡眠障害、精神症状、疲労や疼痛とうつなどの非運動症状が見られることもあります。これらは、運動症状が現れる前に見られることもあります。

自律神経症状

便秘、頻尿、立ちくらみ、食後のめまいや失神、発汗、むくみ、冷え、性機能障害などが現れることがあります。

認知障害

遂行機能障害（いくつかの手順を踏む行動が計画できなくなる）や認知症症状（ものが忘れがひどくなるなど）が見られることがあります。

嗅覚障害

においがしなかったり、感じにくくなったりすることがあります。

睡眠障害

夜眠れなくなる不眠の症状や日中眠くなるなどの症状が現れることがあります。

精神症状

気分が晴れないうつ症状や、アパシーと呼ばれる身の周りのことへの関心が薄れたり日常動作をする気力がなくなったりする状態が現れることがあります。

疲労、疼痛、体重減少

疲れやすくなる、肩や腰、手足の筋肉に痛みが現れる、体重が減るなどの症状が見られることがあります。

・ 冷え症

冷え症はその名のとおり、皮膚の温度が低下する症状のことです。

発症する部位や時期などはさまざまであり、よく見られるのは寒い季節や過度な冷房などに晒された際に手足の先端に発症するタイプです。重症な場合には手足の先端がいわゆる“しもやけ”になったり、皮膚の色が白くなりしびれや痛みを引き起こしたりするケースも少なくありません。一方で、下半身の筋力が低下しているケースでは脚や腰を中心に冷えやすくなり、冷たい飲食物を多量に摂取すると胃や腸などの消化器官が冷えることもあります。また、冷え症は病気ではなく“体質”の1つと捉えられることもありますが、冷えが長く続くと頭痛、肩こり、腰痛、関節の痛みやしびれ、便秘や下痢などの身体的症状、イライラ感や不眠などの精神的症状を引き起こすため軽く考えずに適切な対処が必要です。

・ 皮膚悪性リンパ腫

皮膚悪性リンパ腫にはさまざまなタイプがありますが、一般的には、紅斑こうはんや丘疹きゅうしん、水疱などの湿疹症状からはじまります。

長い経過をかけて進行すると皮膚に大きな塊を形成して、びらん（ただれ）や潰瘍、出血などを生じ、やがてリンパ節や肝臓・脾臓・肺などの臓器に転移を引き起こします。

また、進行すると、場合によっては白血球数の著しい減少などが生じ、免疫力が低下して発熱や倦怠感などの全身症状が見られることもあります。

・皮膚がん

皮膚がんの多くは、表皮を構成する 4 つの層のうち、もっとも深層にある基底層やその上層にある有棘層の細胞から発生すると考えられています。

がんのタイプにもよりますが、多くは黒～褐色のまだらなしみのような病変が現れます。そして進行するにしたがって病変が広がり、表面が凹凸状に盛り上がってしこりを形成するようになります。そのため、早期段階では“ほくろ”と見なされるケースも少なくありません。また、しみやしこりのような病変は通常、痛みやかゆみなどの症状を伴いませんが、進行すると病変部の表面の組織が脆くなり、衣類の摩擦など些細な刺激で出血し、痛みを引き起こすことがあります。また、病変部分は皮膚のバリア機能が低下しているため細菌感染を起こしやすく、膿うみが生じるなどで悪臭を放つようになることもあります。

一方で、基底細胞がんや有棘細胞がんなど多くの皮膚がんは緩やかに進行するため、早い段階で治療をすれば治る見込みは高いとされています。しかし、皮膚がんの中でも悪性黒色腫は、周辺のリンパ節や脳・肝臓など離れた部位の臓器に転移を起こしやすいことも知られており、発症すると助かる見込みの低いがんの 1 つとされています。

・百日咳

カタル期、痙咳けいがい期、回復期と呼ばれる 3 つの経過がみられることが特徴です。これらの症状は、ワクチン未接種の乳幼児でみられることの多い症状です。

カタル期

原因菌に感染してから 7～10 日程度の潜伏期間を経て、通常のかぜのような症状がみられます。

次第に咳の回数や程度が強くなります。持続期間は約 2 週間とされています。

痙咳期

約 2～3 週間にわたって、痙咳と呼ばれる、特徴的なけいれん性の咳の発作がみられるようになります。

短い咳が続いた後に、息を吸うときにヒューという笛のような音が出る咳症状が発作的に繰り返されます。また、嘔吐を伴うこともあります。発作は夜間や何らかの刺激が引き金となったときに起こることが多く、発作がないときは無症状であることが多いです。

月齢の低い乳児の場合は特徴的な咳発作がみられないことも多く、息を止めているような

無呼吸発作がみられ、チアノーゼ（血中の酸素が不足して皮膚が青色に変化すること）、けいれん、呼吸停止に至ることがあります。

回復期

激しい咳の発作が次第に治まり、2～3 週間程度でみられなくなります。しかし、時折発作性の咳が現れることもあり、完全に回復するのは発症から2～3 か月程度です。

成人の場合は、咳発作がみられることなく回復期に移行することもあります。

ワクチン接種をしている場合は、長引く咳などが症状のことが多いです。

・貧血

貧血に伴って現れる症状は以下のとおりです。

めまいや立ちくらみがある

よく頭が痛くなる

息切れがする

倦怠感けんたいかんがある

疲れやすくなる

味覚がおかしくなる

朝すっきりと起きられない

集中できなくなる

顔色が悪くなる

胸が痛む（心臓病など心臓のはたらきが低下しているため）

爪がもろくなる

口角炎や舌炎が生じる

飲み込みづらくなる

など

症状が強くなると、やる気が起きないなど日常生活に支障が出ることもあります。

ときに無症状のことがあり、健康診断などで行われた血液検査の結果から貧血を指摘されることもあります。

・鼻炎

鼻炎の症状は原因によって大きく異なり、具体的にはそれぞれ次のような症状が現れます。

ウイルスや細菌感染による鼻炎

ウイルスや細菌の種類によって症状は異なりますが、一般的には鼻水や鼻づまり、嗅覚低下、くしゃみ、せきなどの症状が引き起こされます。鼻水は発症して間もなくの頃は透明でサラサラした性状ですが、時間が経過すると病原体や白血球などの死骸が含まれるようになるため黄～緑色の粘性のある性状に変化します。また、炎症がひどい場合には発熱が見られ、鼻の粘膜に強いダメージが加わることで鼻の中の痛みや乾燥感を覚えることも少なくあり

ません。

通常は数日で改善していきますが、炎症が長引くと鼻水や鼻づまりなどの症状が慢性化したり、副鼻腔炎を併発したりすることもあります。

アレルギーによる鼻炎

アレルギーが生じることによって引き起こされる鼻炎も、基本的には鼻水や鼻づまり、くしゃみなどの症状が現れます。しかし、感染による鼻炎のように症状が続くわけではなく、原因となるアレルゲンに晒されることによって突発的に強く症状が現れ、アレルゲンが排除されると自然に症状が軽快していくのが特徴です。感染による鼻炎と比較して鼻のかゆみを訴えることが多く、鼻閉が続くと嗅覚障害も生じます。

また、鼻水は透明で水のようにサラサラした性状であり、一度に多くの量が排出されます。そのほか、目のかゆみや涙、蕁麻疹じんましんなど鼻以外の部位にアレルギー症状が引き起こされるケースも少なくありません。

その他の原因による鼻炎

上で述べた血管運動性鼻炎は、発症の原因となる状況に陥ると鼻水や鼻づまりなどアレルギーによる鼻炎と同じような症状が現れます。

・ビタミン A 欠乏症

ビタミン A 欠乏症の初期症状としてよくみられるのが夜盲症（暗い場所で周りが見えにくくなること）です。

ビタミン A は、目の網膜で光を感じるために必要なタンパク質であるロドプシンの原料となります。そのため、ビタミン A の不足によるロドプシンの減少で、暗闇における視界が悪くなるのです。眼球乾燥症や視力低下もみられることがあり、進行すると失明する可能性もあります。

また、皮膚や粘膜の角化（硬く厚くなること）・乾燥、免疫力の低下、子どもの発達の遅れを引き起こし、麻疹ましんなどの感染症が重症化することもあります。

・ビタミン K 欠乏症

ビタミン K 欠乏症の症状は、出血のしやすさに関連したものになります。消化管や皮下、口腔粘膜からの出血頻度が高いです。また新生児・乳児の場合、頭蓋内出血の頻度が多く、予後不良となります。

新生児・乳児におけるビタミン K 欠乏症は、出生後 2～4 日に発症することが多いといわれています。母親がワルファリンカリウムや抗てんかん薬を内服している場合、生後 24 時間以内に発症することもあります。

母乳栄養児においては、母乳中のビタミン K の含有量がミルクよりも少ないことと関連して欠乏症を引き起こすことがあります。生後 2 か月頃までは出血のリスクは高いと考えられています。

・ビタミン D 欠乏症

ビタミン D 欠乏症では、血液中のカルシウム濃度の低下を補うために分泌される副甲状腺ホルモンのはたらきにより骨密度の低下が起こります。

健常な成人であれば、通常はビタミン D が極端に欠乏していても症状は出にくいといわれています。しかし、ビタミン D が欠乏している状態に加齢や消化器疾患、グルココルチコイド製剤の使用、遺伝的な影響などの要因が加わると、ビタミン D 欠乏症の代表的な症状でもある骨密度の低下などを伴うことがあります。特に遺伝的な影響が強い場合には、血中カルシウム濃度の低下の程度が強くなり、非常にまれなケースだと手足や口のしびれ、動かしにくさが生じることがあります。

また、場合によっては同時に血中リン濃度が低下し、小児では低身長や足の変形（強い O 脚や X 脚）を起こす“くる病”や、成人では骨にひびが入りやすくなる“骨軟化症”を起こすこともあります。なお、若年であるほど血中リン濃度の基準範囲は高いことが知られており、おそらくは骨の成長に比較的高い血中リン濃度が必要であるためだと考えられています。このため、小児のくる病では成長障害や下肢の変形はきたしますが、血中リン濃度が極端に低下し成人の基準範囲以下となることは少ないため、骨にひびが入りやすくなる骨軟化症に至る子どもは非常に少ない傾向にあります。

また、くる病および骨軟化症を起こすと小児、成人ともに歯髄しずい（歯の奥にある空洞）に感染を生じる歯髄炎を起こしやすくなります。

・ビタミン B1 欠乏症

初期のビタミン B1 欠乏症では疲労、食欲不振などがみられることがありますが、人によって程度や症状はさまざまです。

重度のビタミン B1 欠乏症では脚気、ウェルニッケ・コルサコフ症候群と呼ばれる深刻な病気を引き起こすことがあります。

脚気

全身の倦怠感、食欲不振、手足のしびれやむくみ、息切れ、動悸などを症状とする病気です。ビタミン B1 の欠乏により末梢神経まっしょうしんけいや中枢神経が障害されることで起こります。重症化すると心不全を起こして命に危険を及ぼすこともあります。

ウェルニッケ・コルサコフ症候群

ビタミン B1 の欠乏で起こるウェルニッケ脳症とその後遺症のコルサコフ症候群を合わせた言葉です。ウェルニッケ脳症はビタミン B1 が不足して脳幹部に微小な出血が起こり、細かい目のふるえや意識障害、ふらつきなどの症状が突然現れる病気です。10～17%程度は死亡に至り、回復した場合でも高い割合で記憶障害や錯乱などを症状とするコルサコフ症候群に移行します。

・B型肝炎

B型肝炎は、感染の状態により一時的な症状で終わる一過性感染と、HBVを保有し続ける持続感染に分けられます。

急性肝炎：一過性感染

一過性感染は、主に免疫機能が発達した成人が感染した場合に認められます。具体的な症状として、1～6か月の潜伏期間を経て、全身の倦怠感や食欲不振、黄疸おうだん、褐色尿などが現れます。症状の程度はさまざまで、軽度の倦怠感で終わる人もいますが、約3割は肝機能が低下し黄疸を発症します。

一般的には数週間でピークを迎え、その後回復に向かいますが、1～2%程度は症状が進行し、劇症肝炎を発症します。劇症化すると、肝性昏睡かんせいこんすい（肝性脳症）という肝機能低下による意識障害が起こり、命に関わる可能性があります。

慢性肝炎：持続感染

持続感染は、母子感染や3歳以下の幼少期に感染した場合に起こりやすいといわれています。持続感染の場合、ウイルスを保有しているものの、肝機能が正常で特別な症状が認められない“無症候性キャリア”が約80～90%を占めているとされます。

残りの約10～20%では、継続的な炎症が続く慢性肝炎の症状が現れます。このうち年間約2%が肝硬変へと移行し、肝細胞がんや肝不全に進行するとされています。

・ピロリ菌感染

ピロリ菌に感染しても、初期のうちには特徴的な自覚症状がないことがほとんどです。しかし、感染したまま放置しておくと、胃炎や胃潰瘍、十二指腸潰瘍、萎縮いしゆく性胃炎、さらには胃がんなどを引き起こします。これらの病気が起きると、胃のむかつき、胃の痛み、吐き気などの自覚症状が認められるようになります。この他にも、MALTリンパ腫といった血液の病気を引き起こしてしまうこともあります。

胃潰瘍や十二指腸潰瘍などの消化性潰瘍は、ピロリ菌感染者の10～15%程度が発症するといわれています。また、ピロリ菌に感染し数十年の経過を経ると、3～5%程度が胃がんを発症するといわれています。

・風疹

風疹は、風疹ウイルスに感染してからおよそ2～3週間の潜伏期間を経たのちに病気を発症しますが、症状がないか、ごく軽いために感染したことに気付かないこともあります（不顕性感染といいます）。風疹の症状として、全身のだるさ、倦怠感けんたいかん、微熱、関節痛、首のリンパ節の腫れなどがあります。首のリンパ節の中でも、特に耳の後ろや後頭部にあるリンパ節が腫れることが特徴です。

また、経過中に皮膚に発疹ほっしんが出ることがあります。発疹は、数日から1週間の経過であとを残すことなく消えることがほとんどです。三日はしかと呼ばれることもある風疹

は、発熱や発疹などをきたすはしか（麻疹）に似ていますが、麻疹に比べて症状は軽く経過します。

まれに子どもに重篤な合併症を呈することもあります。けいれんや意識状態の悪化をきたす脳炎や、血液の異常で出血をしやすくなることがあります。

風疹を考えるうえで、先天性風疹症候群はもっとも大きな問題です。子宮内の赤ちゃんがうまく成長できず、子宮内で赤ちゃんが亡くなることもあります。さらに、産まれてきた赤ちゃんに先天性心疾患、白内障、緑内障、小頭症、脳炎、聴覚器の異常などがみられることもあります。こうしたことと関連して、哺乳障害、成長障害、発達障害、難聴、視力障害などがみられます。また生まれた後、何か月もウイルスを排出するので周りの赤ちゃんにうつさないように感染対策も必要になります。

・副甲状腺機能亢進症

副甲状腺機能亢進症による症状は、とても判りにくいものであり、注意しなければそれと気付くことができないことも多々あります。例えば、疲れやすい、注意力が散漫でぼーとしている、いらいら感などです。症状が強いとうつ状態になる方もいます。こうした精神的な症状以外に吐き気や腹痛、尿路結石などの症状を見ることがあります。症状がさらに進行すると、多尿やそれに付随した多飲、腓炎、血圧上昇なども見るようになります。カルシウムの濃度が異常に高くなる場合には、意識障害を呈することもあります。また、副甲状腺ホルモンはカルシウム代謝に密接に関わっていることから、副甲状腺機能亢進症では骨にも異常を来すことがあります。骨の量が減り、骨が弱くなって関節痛や腰痛を起こします。また、骨痛や骨変形や病的骨折などを起こしやすくなります。

・副甲状腺機能低下症

副甲状腺機能低下症による症状は、低カルシウム血症に関連したものであり、テタニーと呼ばれる特徴的な手足や口回りの筋肉の痙攣けいれんが代表的なものです。手足やおなか、口回りの筋肉に痛みやつったような感覚が生じることもあります。その他、手足のぴりぴりした感じ、焼けるような感覚異常が生じることもあります。さらに疲れやすさ、ひどい生理痛、部分的な脱毛、皮膚の乾燥、もろい爪、また歯の発育が障害される場合もあるほか、白内障も起こりやすくなります。

また、気分の落ち込みが強くなることもあり、うつ病と間違われることもあります。症状が強い場合には、けいれんを起こすことや、腎機能障害や不整脈を生じることもあります。幼小児期から低カルシウム血症が補正されない状態が持続すると、低身長や精神発達遅滞、てんかんの誘因となる脳へのカルシウム沈着などがみられることもあります。

・副鼻腔炎

副鼻腔炎の一般的な症状は、鼻汁、鼻閉、後鼻漏こうびろう（鼻汁が喉の奥に流れること）、

頭重感、顔面の痛みや圧迫感、嗅覚障害などさまざまなものがあります。

咳や発熱などの症状がみられることもありますが、急性の場合には、急性上気道炎も同時期に発症することが多く、どちらからの症状なのかを判断することは困難です。

また、細菌感染による副鼻腔炎では歯痛と口臭が生じることもあり、虫歯を疑って歯科医院を受診した結果、副鼻腔炎と診断されるケースもあります。

副鼻腔炎の多くは軽い症状のみですが、炎症が脳内や目に波及すると、脳や目に膿うみがたまったり、髄膜炎や海綿静脈洞血栓症などの重篤な合併症を引き起こしたりすることもあります。

・腹膜炎

腹膜炎は発症原因やタイプによって症状の現れ方が大きく異なります。

お腹の臓器に穴が開いたり、炎症が波及したりすることによって生じる腹膜炎では、強い腹痛、吐き気・嘔吐、発熱などの症状が現れます。

・フグ中毒

フグ中毒の症状は、テトロドトキシンの摂取量により異なります。重症度は以下 4 段階に分けられます。

I 度：唇や舌、指先のしびれ

II 度：手足の感覚異常、軽い麻痺まひ

III 度：全身が動かしづらい、声が出しづらい、息苦しい

IV 度：呼吸筋麻痺による換気不全・低酸素血症、低血圧・徐脈、意識障害

・不整脈

不整脈と言っても症状の程度は異なります。少し脈が飛ぶ程度のものがある一方、突然死を起こすものもあります。不整脈の中でもっとも多いのは、予定されていないタイミングで脈が生じる“期外収縮”です。期外収縮は危険性のない不整脈で、発生しても自覚症状が現れないことがあります。

“頻脈”や“徐脈”にはさらに細かな分類があり、原因もさまざまです。たとえば、スポーツ選手は通常よりも心拍数が遅くなることがありますが、これは病的なものではありません。重篤な不整脈としては、命に関わる危険な“心室細動”や“持続性心室頻拍”、“トルサード・ド・ポアンツ”などがあります。また、徐脈性不整脈では“完全房室ブロック”、“洞不全症候群”などがあります。

このような危険な不整脈では、脳への血流が不十分となり、失神やふらつきを起こすことがあります。また、心臓が十分量の血液を全身へと供給できなくなった結果、息切れや呼吸困難などの心不全症状を呈することもあります。さらに、心房細動では、心房内に血栓を形成することがあります。心房内の血栓は血流に乗って全身へ飛ばされる恐れがあるため、脳梗

塞の発症リスクも上昇します。

・二日酔い

二日酔いの症状の現れ方は人によって大きく異なりますが、吐き気・嘔吐、胸やけなどの消化器症状、頭痛、動悸や発汗、気分の変動といった自律神経症状など多岐にわたります。さらに、二日酔いが生じるほど多くのアルコールを摂取すると、脱水や低血糖状態を引き起こしやすくなるため、それが二日酔いの症状をさらに悪化させるという悪循環に陥ることも少なくありません。

一般的に二日酔いは飲酒から時間が経過すればするほど症状は改善していきます。しかし、アルコールの摂取量やアルコールを分解できる能力などの体質、飲酒日の体調などによって症状の重さや継続する時間は異なります。中には、さらにその次の日まで症状が続き、社会生活に支障をきたすこともあるため注意が必要です。

・不眠症

不眠症の原因としては、不適切な生活習慣、心理的なストレス、アルコールなどの嗜好品や薬物、心身の病気などが挙げられます。

不適切な生活習慣には、現在の日本社会の様相が大きく影響しています。本来ヒトの体内時計は、1日平均 24.18 時間でリズムを刻んでいます。1日 24 時間の枠組みの中で決まった時間に寝起きし規則正しい生活を送るには、日中の活動時間に光を浴びて体内時計をリセットすることが必要不可欠です。しかし、深夜営業・終夜営業のコンビニの存在、就寝前のスマートフォンの利用、24 時間稼働の工場勤務や夜勤労働など、不適切なタイミングで光を浴びることでヒトの体内時計に狂いが生じます。

そのほか、家族や親しい友人の死去、仕事の過度なストレスなどの心理的なストレスも不眠症の原因になります。また寝付きをよくするためにアルコールを飲む方もいますが、むしろアルコールは夜間の睡眠の質を悪化させるため、結果として不眠症を引き起こす要因になります。

不眠症では、夜間の不眠症状が基盤にあります。不眠症状のタイプとしては入眠困難、睡眠維持困難、早朝困難があります。

“入眠困難”はなかなか寝付けないことです。寝るまでに 30 分から 1 時間かかる場合がこれにあたります。不眠症の中でもっとも訴えの多いものです。

“睡眠維持困難”はいったん眠りについても何度も目が覚めてしまう、目が覚めた後に眠れない場合がこれにあたります。年齢を重ねるとともに眠りが浅くなり目が覚めやすくなります。お年寄りに多くみられるタイプです。

“早朝覚醒”は朝早く目が覚めてしまい、そのまま眠れない場合です。年齢を重ねるとともに体内時計のリズムが前にずれやすく、この症状が出やすくなります。

不眠症では、こうした不眠症状により日中の機能障害が生じることが特徴です。具体的には、

仕事や学業に支障をきたすなどのパフォーマンスの低下、集中力や記憶力の低下、やる気が出ない、情緒の不安定さ（気分がすぐれない・イライラしやすいなど）がみられます。

・フレイル

フレイルは、健康な状態と介護が必要となる状態の中間の状態を指します。年齢のせいと間違われる症状が多く、痩せてきた、握力が低下してきた（ペットボトルの蓋が開けにくい）、横断歩道が青信号の途中からでは渡りにくいなどが、診断基準にのっとった症状です。

フレイルにおけるもっとも注意すべき症状は転倒、骨折です。その他、排尿障害、視力低下、活力低下、息切れ、物忘れなどが挙げられます。

これらを見過ごしていると、更なる心身機能の低下が生じ、風邪をこじらせやすくなって肺炎を発症したり、転倒しやすくなって骨折したりする可能性が高くなり、最終的には介護が必要な状態に陥る危険性が増すとされています。

・ヘルニア

ヘルニアは突出する位置や隙間の大きさによって症状が異なります。

いずれのタイプも重たいものを持つことや排便する際に、お腹に力が入ったり立ち上がったりすると、隙間などから腸管の一部が突出して柔らかいふくらみを触れるようになります。多くは力を抜くと自然と腸管が元の位置に戻ってふくらみは触れなくなりますが、隙間が大きい場合などは常に腸管が突出した状態となります。また、突出した腸管の容積が大きい場合や隙間が狭い場合などは腸管がすっぽりとはまり込んで元に戻らなくなります。このような状態を嵌頓ヘルニアと呼びます。腸管が締め付けられて血行が悪くなるため腹痛、吐き気、嘔吐、発熱などの症状がみられるのが特徴です。特に大腿ヘルニアと閉鎖孔ヘルニアは嵌頓ヘルニアになりやすいため注意が必要です。

なお、ヘルニアは嵌頓状態にならないければ腸管の一部が突出しても軽度のつっぱり感などが生じるのみで強い痛みが引き起こされることはありません。しかし体の外からは見えず、閉鎖孔の場合は閉鎖孔を通る神経が刺激されて太ももの内側に痛みやしびれが生じることもあり、足の病気と間違われる原因となります。

・片頭痛

片頭痛は、脈に合わせて“ズキン、ズキン”と拍動するように痛むのが特徴的です。また、頭痛とともに吐き気をきたし、ひどいと嘔吐してしまうこともあります。痛みは 4～72 時間ほど持続し、片側が痛むことが多いですが、両側が痛むこともあります。

また、片頭痛が起こっているときは音や光に敏感になり、暗い静かなところでじっとしているほうが楽に感じます。普段は気にならない程度のニオイや香りにも敏感になって、わずらわしく感じたりします。頭痛の最中は、階段の上り下りや歩行などといった日常生活の動作で頭痛が悪化するため、寝込んで動けなくなることもあります。

片頭痛持ちの約2割の人には、“前兆”という症状が見られます。頭痛が始まる直前にキラキラ・ギザギザした光が目の前に小さく出現し、徐々に拡大して視界に広がり、その先が見えにくくなります。これが約20～30分持続して、前兆が消えると頭痛が始まります。長くても60分を超えて前兆が続くことはありません。キラキラとした光が見えるなどの視覚的な症状が多いですが、まれに片側の手足の脱力やしびれ、言語障害が見られることもあります。頭痛発作の頻度は人により異なります。月に1～2回程度の方もいれば、週に3～4回程度の方もいます。鎮痛薬などを飲みすぎていると、頭痛が悪化して毎日のように頭痛に悩まされるようになることもあります。

・扁桃炎

扁桃炎の症状は扁桃炎の種類によっても異なりますが、主に喉の症状と全身症状があります。また、扁桃炎を病巣としてほかの臓器に病気を生じる扁桃病巣感染症は体のさまざまな臓器に二次的な病気を生じることがあります。

急性扁桃炎

喉の違和感から始まり、次第に激しい喉の痛みや嚥下痛えんげつう（飲み込むときの痛み）を感じるようになります。また、高熱、全身倦怠感、食欲不振などの全身症状がみられることもあります。

慢性扁桃炎

慢性単純性扁桃炎は喉の違和感や乾燥感、食べ物がしみるといった喉の症状や、微熱や全身倦怠感といった全身症状がみられることがあります。急性扁桃炎に比べると症状は穏やかです。

習慣性扁桃炎は急性扁桃炎を繰り返す扁桃炎で、症状は急性扁桃炎と同様です。

扁桃病巣感染症は、扁桃から離れた皮膚や腎臓などに器質的または機能的な異常を引き起こしますが、扁桃自体には症状がないか軽い症状であることがほとんどです。

・扁桃肥大

扁桃肥大は、口蓋扁桃と呼ばれるリンパ組織が通常よりも大きくなった状態です。摂食障害、いびき、睡眠時無呼吸などの原因になります。

口蓋扁桃が過度に大きくなってしまうと食事や空気の通過に影響が出ます。小児では食が細くなるため、体重が増えにくい原因にもなります。また、気道が狭くなっていますので「いびき」「睡眠時無呼吸」「日中の眠気」「集中力低下」など様々な症状を引き起こします。重篤になると肺性心と呼ばれる病態になることもあります。

口蓋扁桃炎を繰り返すことで扁桃肥大が生じている場合、扁桃に細菌が住みつき、一見関係のない組織に障害を引き起こすことがあります。これを扁桃病巣感染症と呼びます。掌蹠膿疱症、IgA腎症、胸肋鎖骨過形成症などが代表疾患です。

・扁平足

体重をかけなくても足裏が平らになっている、手で矯正しても柔軟性がない扁平足の状態の場合は先天性な病気の可能性があり、歩行時の痛みや疲れなどを引き起こすことがあります。

一方、成人以降に発症する扁平足では内くるぶしの下に痛みや腫れが生じることが特徴です。また、発症から時間が経過するとともに扁平足の変形が目立つようになり、進行すると足が硬くなり歩行障害を引き起こすこともあります。

・発疹

発疹にはかゆみが伴うことが多く、掻きむしってしまうと症状が悪化するばかりか、傷から細菌が入って化膿することもあるため、程度が軽いうちに対処すべきといえるでしょう。また、発疹は広範囲に起こることもあれば一部分にだけ起こることもあり、主に頭皮、顔、頬、手のひらなど、露出している部分に現れやすい傾向があります。

また、発疹は大人にも子どもにも起こりえるものですが、子どもに起こりやすい病気というのも存在します。

・膀胱炎

膀胱炎で多く見られる症状は頻尿、残尿感、排尿痛です。具体的には、何度もトイレに行きたくなる（頻尿）、排尿してもすっきりした感じがしない（残尿感）、排尿した後に下腹部や陰部が痛い（排尿痛）という症状が突然起きることが多いです。

ほかにも、尿が混濁することや血液が混ざった赤い尿（血尿）を認める場合があります。膀胱炎では通常発熱を伴うことはありません。発熱を伴う場合には、膀胱より上に位置する腎臓まで細菌が侵入し、炎症を起こしている可能性があります。

・ポリープ様声帯

浮腫により声帯全体が重くなり、適切な振動を行うことができなくなります。そのため、声は低くなります。その他、のどの違和感、乾燥感などといった症状を呈することもあります。浮腫が高度になると空気の通り道が狭くなるため呼吸が苦しくなります。

・マイコプラズマ肺炎

マイコプラズマ肺炎は、原因となるマイコプラズマに感染して2～3週間の潜伏期間を経た後に発熱、だるさ、頭痛など一般的な“風邪症状”が現れるのが特徴です。

肺炎の特徴的な症状である咳などの呼吸器症状は発症後3～5日ほど経ってから現れることが多いとされています。また、発熱などの全身症状は通常数日で改善しますが、咳のみが1か月ほど続くのも特徴の1つです。

そのほかにも胸の痛み、喉の痛み、声のかすれ、下痢・嘔吐、皮疹など多岐にわたる症状を

引き起こすことも知られています。

そして、重症化した場合は細気管支炎を併発し、ゼイゼイとした苦しそうな呼吸が見られることも少なくありません。また、中耳炎、髄膜炎、肝炎、膵炎すいえん、関節炎などさまざまな合併症を引き起こすケースもあり、特に成人が発症すると小児よりも重症化しやすいとされています。

・麻疹(はしか)

麻疹は麻疹ウイルスに対して抗体（病原体を攻撃するタンパク質）を持たない人が感染すると次のような症状が引き起こされます。

まず、麻疹ウイルスに感染すると 10～12 日間の潜伏期を経た後に 38℃前後の発熱が 2～4 日間ほど続き、体のだるさ、喉の痛み、鼻水、咳、充血、目やになどの症状が現れます。その後いったん熱は下がるものの、半日程度で 39℃前後の高熱が現れ、おでこ、耳の後ろ、首などに赤い発疹ができて 2 日ほどで全身に広がっていきます。この時期には上述したいわゆる“風邪症状”はさらに悪化していきませんが、3～4 日間すると徐々に熱が下がっていき、さまざまな症状も改善していくのが特徴です。

このように、麻疹は通常であれば発症から 7～10 日間で回復しますが、重症化すると肺炎や脳炎などを引き起こすケースもあり、別の細菌感染による中耳炎などを同時に発症することも少なくありません。

また、一般的に小児期にかかったときの症状よりも、成人になってからかかったほうが、より症状が重くなるといわれています。

・末梢性めまい症

末梢性めまい症では、グルグル回る感じや、ふわふわした感じと表現されるようなめまいが現れます。数秒程度でおさまることがある一方、数時間から日をまたぐ形でめまいが持続することもあります。

また、原因となっている病気によって、さまざまな特徴がみられることもあります。

たとえば、良性発作性めまい症では、頭を特定の方向に向けたときにめまいが誘発されやすいです。そのため、布団を干すときに頭を挙げる際、髪の毛を洗うときに頭を動かす際など一定の動作によってめまいが誘発されます。

メニエール病を原因とする場合には、めまいに加えて耳鳴りや難聴、耳閉感（耳が詰まった感じ）などの症状が同時に現れます。また、こうした症状が繰り返し生じることも特徴のひとつです。突発性難聴では、突然耳が聞こえなくなり、それに付随してめまいが生じることがあります。

このように、原因によって症状の特徴があるため、めまい以外の症状に注目することも重要です。

・マラリア

マラリアは“ハマダラカ”という蚊を介して、マラリア原虫に感染することで発症する病気です。マラリアの主な症状として、寒気やふるえ（悪寒戦慄）を伴う高熱、頭痛、筋肉痛、関節痛、下痢、嘔吐などが挙げられます。また、発熱は発熱期と無熱期を繰り返すことが特徴です。この間隔は種類によって異なり、熱帯熱マラリアでは 36～48 時間ごと、もしくは不規則で、四日熱マラリアでは 72 時間ごと、三日熱マラリアや卵型マラリアでは 48 時間ごと、サルマラリアでは 24 時間ごとに生じるといわれています。

発熱期はさらに悪寒期と灼熱しゃくねつ期に大別されます。悪寒期は 1～2 時間ほどかけて悪寒を感じながら体温が上昇し、灼熱期は悪寒の症状は消失し、4～5 時間は熱感を感じるといわれています。

重症化すると脳症、低血糖、腎障害、肝障害、重症貧血などといった合併症がみられることがあります。妊婦や小児、免疫力の弱い方は重症化しやすいため、特に注意が必要です。

・慢性胃炎

慢性胃炎とは、長期間にわたり胃炎が続いている状態のことです。慢性胃炎にはヘリコバクター・ピロリ菌の感染がかかわっていると考えられています。ピロリ菌が胃の中に棲みついてしまうことで少しずつ胃粘膜を痛めつけて、何十年にもわたって徐々に炎症が広がっていくことで起こります。慢性胃炎の症状としては上腹部不快感、上腹部痛、食欲不振などさまざまです。近年では症状がなくても、検診や人間ドッグなどで行うスクリーニングとしての上部消化管内視鏡で指摘されることが多くなってきています。

・慢性気管支炎

慢性気管支炎は、原因不明の咳や痰たんが 3 か月以上持続し、さらにそれが 2 年以上続いている場合を指します。あらゆる検査を行って、それでもはっきりとした原因が分からないときに慢性気管支炎と診断されます。慢性気管支炎は、受動喫煙も含めた喫煙習慣をリスク因子として発症します。慢性気管支炎では、原因不明の咳や痰が 1 年のうちに 3 か月以上持続し、なおかつそれが 2 年以上続くことになります。痰と一言にいっても、その性状は一概に定義することは難しいです。

慢性的な炎症を起こしている箇所に、慢性気管支炎の直接的な原因とはならないような細菌などが多く付着していることがあります。そのため、付着している細菌によって黄色や緑色など、色のついた痰がみられることがあります。

また、なかには 1 日 200～300cc と大量の痰が出てくる方もいて、これによって呼吸困難感が強く現れることもあります。

さらに、慢性気管支炎は肺気腫と合併することも多く、少しの運動で呼吸困難を感じたり、体重減少がみられたりすることもあります。また、風邪などの呼吸器感染症をきっかけとして呼吸症状が悪化することもあります。

・慢性結膜炎

一般的な急性結膜炎よりも軽度の症状が長く続くのが特徴です。具体的には、目の充血、目やに、かゆみ、異物感などの症状が続くようになります。目やには急性結膜炎から慢性結膜炎に移行していくと分泌量は少なくなりますが、粘り気があるものが分泌されるようになるとされています。

また、慢性結膜炎ではまぶたの裏の粘膜にぶつぶつができたり、炎症によって生じた分泌物が沈着して固まる“結膜結石”を引き起こしたりすることが知られています。このような症状が現れると目の異物感といった症状が強くなりがちです。

・慢性下痢

3週間以上下痢が続きます。下痢の回数はさまざまですが、1日に3回以上の排便がみられます。また下痢が起こるタイミングもまちまちであり、過敏性腸症候群ではストレスがかかる状況、トイレに行きにくいような状況（たとえば長距離移動中の電車のなかなど）でみられる傾向があります。

下痢の性状として、水様性下痢が主体なこともある一方、下痢に血液が混じることもあります。下痢中に血液が混じるのは、炎症性腸疾患でみられることの多い症状です。慢性的な下痢が続くと、体力が消耗することから徐々に体重が減少することもあります。

また、原因疾患に応じてそれに伴う症状が異なることもあります。

たとえば、過敏性腸症候群では下痢だけでなく便秘の症状が出ることもあります。炎症性腸疾患では、発熱や貧血症状などが起こることもあります。下痢以外の症状に注目することは、原因となっている疾患を推定するうえでも重要といえます。

・慢性甲状腺炎

慢性甲状腺炎を発症すると、甲状腺に慢性的な炎症が生じることによって甲状腺が腫大し、前頸部ぜんけいぶの腫れが生じるようになります。そのため、首や喉の圧迫感や違和感がみられる場合もあります。

また、甲状腺ホルモンの不足が進行すると全身の新陳代謝が低下することによって、むくみ、寒がり、体重増加、皮膚の乾燥、脱毛、便秘、声のかすれ、生理不順などの身体症状、抑うつ気分、無気力、倦怠感けんたいかん、疲労感、もの忘れといった精神的な症状が現れます。

・慢性喉頭炎

慢性喉頭炎を発症すると、発声に関連した症状がみられます。具体的には、声がかれる（嗄声させい）、声が出しづらくなる、などの症状です。

また、のどに位置する喉頭に炎症が生じることで、のどの違和感や、飲み込みのときの痛みなどを感じる、咳が出るなどがあります。以上の症状はその他の喉頭の病気で、特

に喉頭がんなどでは慢性喉頭炎と同様に喫煙習慣と関連して発生することが多く、症状もよく似ています。

・慢性心不全

心不全は心臓の機能の不調により、体の活動に十分な酸素や栄養素が行き渡らなくなります。その結果、手足の冷え、動悸、息切れ、食欲低下、倦怠感けんたいかんなどの症状が現れるようになります。また、体のさまざまな部位で血液がうっ滞するため、むくみや体重増加が生じたり、重症な場合には肺に水がたまることによる呼吸困難・肝臓や脾臓ひぞうの腫大といった症状が現れたりするようになります。

呼吸困難などの重篤な症状は横になった状態のときに現れやすいため夜間に目立つ症状ですが、進行すると安静にしているときにも現れるようになります。そのため、活動性は著しく低下して日常生活に支障をきたすようになることも少なくありません。

また、進行するほど心臓への負担が大きくなり、突然死の原因にもなりうる不整脈が引き起こされることもあります。

・慢性腎臓病

重症度によって症状の出かたが異なります。軽症の場合には、無症状のことがほとんどです。しかし、腎機能の低下が進むと、むくみ、夜間尿（夜間に何度もトイレに行きたくなる症状）、倦怠感けんたいかん、食欲の低下、吐き気、手足のしびれなどの症状が出ます。さらに進むと、肺に水が溜まり、息苦しさが出てきます。

・慢性中耳炎

遷延した炎症により音の伝わりが障害され、難聴をきたします。また、耳漏は感染の悪化により容易に出現し、繰り返します。急性中耳炎と異なり、耳痛は稀です。真珠腫性中耳炎については別項に詳しく述べていますが、周囲骨を破壊することで難聴以外にもめまい、顔面神経麻痺、味覚障害、細菌性髄膜炎など様々な症状が出現します。

・慢性鼻炎

慢性鼻炎で鼻の粘膜が腫れると、空気の通り道が狭くなってしまうため、うまく呼吸ができなくなり、慢性的な鼻詰まりを自覚するようになります。また、鼻詰まりに関連して、匂いや味をうまく感じるができなくなります。

鼻でうまく呼吸ができなくなると口呼吸が主になり、そのことで口が渇きやすくなることがあります。頭痛やいびき、睡眠障害などにつながることもあります。

・慢性副鼻腔炎

鼻腔および副鼻腔粘膜が腫れます。悪化すると鼻茸と呼ばれるポリープも生じます。そして空気の通り道が狭くなり、鼻閉となります。慢性炎症ですので黄色で粘りのある鼻汁が出ます。鼻汁はのどにたれ込む後鼻漏となり、咳嗽の原因になります。

眼、頬、前頭部周囲の重い感じや嗅覚障害も起きます。特に好酸球性副鼻腔炎では嗅覚障害が初発症状のことも多く、注意が必要です。

・慢性扁桃炎

習慣性扁桃炎

1年に3回以上の炎症を繰り返します。

特に未就学児が発症しやすく、一般的には成長と共に軽快していくのですが、成人になっても発症を繰り返す場合があります。

症状は、急性期には急性扁桃腺炎に準じ、38度以上の発熱、咽頭痛、悪寒、関節痛、首のリンパ節腫脹が挙げられます。安定期には何も症状がありません。

また、扁桃腺にある多数の溝に細菌が定着して膿栓のうせを形成します。このような状態になると、腐敗臭のような口臭が生じます。

慢性扁桃腺炎では、扁桃腺の免疫異常が生じやすく、扁桃腺自体には目立った症状がないのに、皮膚や関節、腎臓などの扁桃腺から離れた臓器に全くことなる病気が起こることがあります。手のひらや足の裏に膿が溜まった皮疹が多くみられる、掌蹠膿疱症しょうせきのうほうしょう、肋骨、鎖骨に異常な骨化をきたす、胸肋鎖骨過形成、本来は生体を守るべき免疫物質の一つである免疫グロブリンA（IgA）が、腎臓の糸球体に沈着し炎症を起こして血尿や蛋白尿が出現する、IgA腎症の3つの疾患が代表的ですが、このような病気を扁桃病巣感染症といいます。

慢性単純性扁桃腺炎

主に大人が発症するものです。飲酒や喫煙の刺激によって絶えず扁桃腺にダメージが加わった状態が続くと、炎症が慢性化しさまざまな症状が現れます。

症状は軽度なことが多く、咽頭痛やのどの違和感、乾燥が主なものです。発熱することもあります。微熱であることがほとんどです。

・慢性膀胱炎

急性膀胱炎と同様に排尿痛（特に排尿終末）、頻尿、残尿感の3徴を認めます。しかし、慢性膀胱炎では急性膀胱炎に比して症状が軽度であることもあり、なかには無症状に近い患者さんもいます。

一般に発熱は認めません。発熱を認める場合は、腎盂腎炎や前立腺炎、精巣上体炎を併発している可能性があります。ときに切迫性尿失禁や血尿を認めることもあります。

・味覚障害

味覚低下・脱失

味覚が減退し、味を感じにくくなったりまったく感じなくなったりします。全ての味覚が減退することが多いですが、“甘味だけ感じない”など、特定の味覚のみが障害されることもあります。

異味症

異常な味を感じる症状です。口の中に何も無いのに味を感じる“自発性異常味覚”と呼ばれるものなどがあります。

・水虫

足の指の間の皮がむけ、ときには皮膚が湿ってジュクジュクすることがあります。あるいは、足の裏の皮膚の角質がむけたり、厚くなってごわごわした感じになったりします。小さな水ぶくれができることもあります。強いかゆみを伴うことがありますが、かゆみがない足白癬も多く、かゆみの有無は診断に役立ちません。片方の足からうつてくることが多く、軽症例では左右対象に出てくることはまれです。両足に同程度見られた場合はしばしばほかの病気（汗疱、掌蹠膿疱症、しょうせきのうほうしょう）が疑われます。

・ミトコンドリア異常症

ミトコンドリア異常症では、全身各所に多種多様な症状が出現する可能性があり、特に神経や筋肉に症状がみられます。

たとえば、もっとも多いタイプである MELAS では、神経症状としてけいれんやてんかん、脳卒中様発作、運動異常、頭痛、精神発達遅滞などがみられることがあります。

また、筋肉症状としては、疲れやすさや筋力の低下、目の運動障害などがみられます。発症時年齢も幼少期であることがある一方、成人期の発症例もあります。

その他、糖尿病や難聴、不整脈、下痢や便秘、発汗障害、腎機能障害、低身長などがみられる可能性があります。症状の出方・重症度はさまざまであり、診断に至っていない方も少なくないことが推定されています。

・ミトコンドリア脳筋症

ミトコンドリア脳筋症では、エネルギー需要の高い臓器である中枢神経や筋肉に症状が起こることが多いです。具体的には、けいれんや脳卒中、発達の遅れ、疲れやすさ、筋力の低下などが現れることがあります。また、心臓も筋肉で構成される臓器であるため、不整脈や心不全症状（疲れやすさや息苦しさ、むくみなど）などの症状が現れることもあります。そのほかにも、難聴や低身長、糖尿病、腎不全、便秘、下痢など全身に渡って多彩な症状・病態が出現することがあります。全身各所に症状が現れる可能性のあるミトコンドリア脳筋症ですが、乳児の頃に症状が出現して亡くなることがある一方、高齢になってから初めて

病気を抱えていることが判明するケースもあります

一言にミトコンドリア脳筋症といっても、発症様式や病気の経過、予後は実に多彩であるため、個別の評価を受けることがとても大切です。

・無汗症

発汗刺激を受けたり、発汗すべき環境であつたりしても発汗量が正常より少ない場合を乏汗症、まったく発汗しない場合を無汗症と呼びます。汗の分泌障害や排出障害などに起因します。発汗が減少したりなくなったりするため、皮膚が乾燥し、かゆみが出ることがあります。広範囲の無汗症では、高温になると体温調節の障害で、発熱、脱力、易疲労性、頭痛、めまい、嘔気、動悸などが起こります。

・無気肺

無気肺そのものの症状はありません。しかし無気肺が広範囲に生じた場合、肺の一部に空気が入らないと酸素を血液に取り込む効率が低下するため、呼吸困難を生じることがあります。また閉塞性無気肺では、閉塞した場所より奥に細菌が溜まって肺炎を起こすことがあり、発熱や胸の痛み、呼吸困難、倦怠感などが生じることがあります。

・無月経

生理が一度も来ない、あるいはこれまで来ていた生理が来なくなります。一度も生理が来ない原発性無月経の場合は、通常、乳房の発達などの二次性徴もみられません*。

また無月経の人のほとんどは卵巣からの排卵がないため、妊娠に至りません。加えて無月経が長い期間続くと女性ホルモンのバランスが乱れた状態が続き、閉経後に起こり得るような体のほてり、膣の乾燥、骨密度の低下、心臓・血管の病気のリスク上昇などが生じる可能性があります。

・メタノール中毒

メタノールを過剰に摂取・吸引することによって中毒症状があらわれる状態。

発症初期にみられる症状

悪心（おしん：吐き気を催すこと）

嘔吐

腹痛

酩酊（めいてい：ひどく酔っぱらうこと）

めまい

昏睡（こんすい：意識をうしなうこと）*

昏睡は重症例にみられる

主な症状

視力への障害（眼のかすみ、見えづらさ、対光反射*の減弱や消失、失明）

消化器系への障害（悪心、嘔吐、腹痛、下痢、急性膵炎）

呼吸器系への障害（浅く早い呼吸、呼吸困難）

意識障害

・メタボリックシンドローム

メタボリックシンドロームは病気ではないため、特有の症状を述べることは困難です。ただし内臓脂肪が増え、高血圧や高血糖、脂質の異常などがさらに進行してしまうと、動脈硬化が促進されたり、その他の生活習慣病を引き起こしたりすることによって何らかの症状が現れることがあります。

動脈硬化とは、加齢、喫煙、高血圧、肥満、運動不足などの危険因子が重なることによって血管の内側の壁が傷ついたり、脂質が沈着したりすることによって弾力性を失うことです。自覚症状はほとんどありませんが、弾力性を失った血管は脆もろくなって破れやすくなったり、内部が詰まって血行が悪化したりするようになります。その結果、脳出血や脳梗塞、心筋梗塞、大動脈解離、大動脈瘤破裂だいたいどうみゃくりゅうはれつなど突然死の原因にもなりうる重篤な病気を引き起こす可能性が高くなるのです。

また、メタボリックシンドロームではこのような動脈硬化による合併症だけでなく、内臓肥満や生活習慣病がそれぞれ悪化することによる症状が現れることも少なくありません。具体的には、過体重による膝痛や腰痛、高血圧による頭痛、糖尿病による視力低下や腎機能悪化、末梢神経障害まっしょうしんけいしょうがいなどが挙げられます。

・メニエール病

メニエール病の特徴的な症状は、ぐるぐる目が回るような“回転性めまい”、“耳鳴り・難聴”、“吐き気”などです。

発症の仕方は個人差がありますが、一般的には耳が詰まったような違和感や耳鳴り、聴力の低下などが突然現れ、その後めまいの発作が生じます。めまいの発作は30分から数時間続くことが多く、吐き気や嘔吐を伴うことも少なくありません。

そして、メニエール病はいったんこれらの症状が治まったとしても再発しやすいことが特徴のひとつです。再発を繰り返していくうちに症状は悪化していき、特に聴力の低下は発症当初は低い音のみが聞こえにくくなるものの、進行すると高い音も聞き取りにくくなります。

・めまい

めまいは人によってさまざまに表現されますが、自分がぐるぐる回っているような感じ、あるいは天井がぐるぐる回るような感じといった、回転に関連した症状として自覚されることがあります。

そのほかにも、地面がふわふわゆれている、船に乗っているようにふわふわする、乗り物の酔いのように気持ち悪い、などと表現されることもあります。また、立ちくらみの症状がめまいとして表現されることもあります。

また、めまいに伴い、そのほかの症状が現れることがあります。具体的には、以下のような症状です。

耳鳴り、聴こえの低下、吐き気や嘔吐、頭痛、目の見えにくさ、意識消失など

・網膜症

網膜症を発症すると、ものの見え方に重要な役割を担う網膜に障害が生じます。そのため、さまざまな重症度において見え方の変化が生じます。具体的には、視界がぼやける、糸くずや蚊のようなものがみえる、視界が暗くなる、視野が狭くなる、などの症状が現れる可能性があります。

網膜症における症状の進み方はさまざまです。糖尿病網膜症においては網膜の障害がある程度進行してから、初めて自覚症状として認識されることも少なくありません。また、未熟児網膜症のなかでは急速に網膜症が悪化することもあります。

・ものもらい

ものもらいを発症するとまぶたの一部が赤く腫れ、痛みやかゆみが生じるようになります。そして、その部位に膿の塊ができて硬さのある小さなしこりを形成し、痛みや赤み、腫れがさらに強くなるのが一般的です。特に、まぶたの深いところで発症する内麦粒腫は外麦粒腫に比べて症状が強く現れ、まぶた全体が赤く腫れ上がることも少なくありません。また、発熱や悪寒といった全身症状を伴うこともあるとされています。

さらに、ものもらいを発症すると目のゴロゴロとした違和感や目の充血、流涙、まぶしさを感じるといった症状が現れることも多く、重症な場合には目を開けることができなくなることも多々あります。

そして、最終的にはしこりが破れて内部にたまった膿が排出されると、自然に回復に向かうケースがほとんどです。

・夜間多尿

夜間多尿とは、夜間の尿量の多い状態を指します。

夜間多尿を客観的に評価する指数として“夜間多尿指数（＝（夜間尿量/24 時間尿量）×100%）”があります。65 歳を超える高齢者では 33%、若年成人では 20%を超えた状態に夜間多尿と定義されます。また、心不全患者や高齢者は下半身に体の水分がたまりやすく、むくみが生じることがあります。その状態で夜間に横になると、腎臓への血流量が増加するために尿量が増加します。

・薬剤アレルギー

薬剤アレルギーの症状は軽症なものから生命に関わる重篤なものまでさまざまです。症状の現れ方はアレルギーのタイプによって異なります。

I型アレルギー

一般的な症状は蕁麻疹です。重症なタイプでは、気管の粘膜がむくむことで呼吸困難を生じたり、血圧の急激な低下によるショック状態などのアナフィラキシー症状を呈したりすることがあります。

II型アレルギー

溶血性貧血による倦怠感や動悸、息切れなどの貧血症状や黄疸が現れます。また、長期間未治療の状態が続くと胆石症を合併することもあります。血小板減少を起こすものでは、出血しやすくなり、鼻血やアザが生じやすくなります。

III型アレルギー

免疫複合体が障害する組織によって症状はさまざまですが、血清病による発疹や発熱、関節痛、腎炎によるむくみなどが生じます。

IV型アレルギー

蕁麻疹以外の薬疹や薬剤性肝障害などが生じます。

・薬剤起因性腸炎

消化管の粘膜障害により、下痢や腹痛などの消化器症状が出現します。

下痢の回数や性状（水様便、血便など）などは、原因となっている薬剤によって異なります。

消化器症状以外に、発熱や食欲不振、倦怠感などを伴うこともあります。

腸の運動が著しく障害され、麻痺性イレウスや中毒性巨大結腸症などを合併することもあります。この場合には、嘔吐や腹痛が増加し、最悪の場合死に至ることもあります。

貧血が進行して、顔色不良、動悸、疲れやすさなどの症状につながることもあります。

・夜尿症

夜尿症はいわゆる“おねしょ”が見られる病気です。しかし、膀胱の機能が未熟で排尿習慣が整っていない小児のおねしょは病的な症状とはいえません。しかし、おねしょの頻度は年齢を重ねていくにつれて徐々に少なくなり、5歳前後にはたまにおねしょをすることはあるものの昼夜を含めて排尿習慣はほぼ完成していきます。一方、5歳を過ぎても1か月に1回以上のペースでおねしょをする場合は、生活改善や治療が必要な夜尿症と定義されるのが一般的です。

また、夜尿症は“おねしょ”以外の症状は見られず、睡眠中に無意識に尿失禁を引き起こすため痛みなどの苦痛はないと考えられています。しかし、年齢が上がっても夜尿症が続く場合は、宿泊を伴う学校行事を極端に嫌がったり、自己否定感が強くなって親や友人とうまくコミュニケーションが取れなくなったりするといった精神的な問題を生じることも少なくあ

りません。

・癰

病変が 1 つの毛包で発生した癰の場合、毛穴に一致して赤く腫れ上がり、痛みや熱感が生じます。感染初期には腫れた部分が硬くなっていますが、数日から数週間程度で柔らかくなって膿瘍が形成されます。腫れた部分の頂上に膿栓という白い点が存在し、ここに穴が開いて破けると膿が排出され、急速に症状が軽快します

癰が悪化した状態の癰では半球状に赤く腫れ、頂上には複数の膿栓を認めます。癰よりも炎症が強いことからより強い痛みが生じ、発熱や体のだるさなどの全身症状も認めやすいのが特徴です。

毛のある部分に起こりやすくなりますが、特に背中や太ももに発生しやすいとされています。

・溶血性貧血

溶血性貧血では、溶血に伴う症状（息切れ・ふらつきなど）が出現します。また、赤血球が壊れることで、ビリルビンという色素が血液中に増え、これによって黄疸おうだん（皮膚や白目が黄色くなる）、褐色尿（茶色の尿）、胆石などがみられることもあります。

・葉酸欠乏症

葉酸は赤血球の成熟に必要な栄養素であるため、葉酸欠乏症を発症すると赤血球数が減少し貧血を引き起こします。また、葉酸が不足すると血液中には成熟していない巨赤芽球と呼ばれる細胞が増えるため、葉酸の不足によって引き起こされる貧血を“巨赤芽球性貧血”と呼びます。症状としては、息切れ、めまい、ふらつき、動悸、だるさなどの一般的な貧血症状が現れます。

また、葉酸は正常な細胞分裂を引き起こす栄養素でもあるため、不足すると舌が荒れ、舌のただれや味覚障害を引き起こすこともあります。さらに、葉酸が不足すると体内ではホモシステインと呼ばれる物質が蓄積し、気分の落ち込み、認知機能の低下、幻覚・妄想などの精神症状を引き起こすことも知られています。

葉酸は胎児期に脳や脊髄せきずいなどの神経が正常に発達するためにも必要な栄養素です。そのため、妊娠初期に母体の葉酸が不足すると胎児の神経系の発達に異常が生じ、無脳症や二分脊椎などの“神経管閉鎖不全”と呼ばれる先天性疾患を引き起こすリスクが高くなります。

・痒疹

非常に強いかゆみが生じます。また赤いポツポツとした丘疹や小結節などの皮膚症状も現れます。こうした症状は急性でおさまることもありますが、慢性的に経過することもあります。

す。

慢性化した痒疹では、諸症状が数か月から年単位で継続したり、皮膚が茶色く硬いイボ化するなどの変化が生じたりすることもあります。

痒疹ではかゆみにより皮膚をかくため、皮膚の一部がはがれてしまい、細菌感染を合併することがあり、伝染性膿痂疹を発症することもあります。また不眠や食欲減退につながることもあります。

原因となっている病気によって現れる症状もあります。たとえば、HIV 感染症に関連して発症している場合には、易感染性を反映して日和見感染症状を併発することがあります。鉄欠乏性貧血であれば、動悸や易疲労感、顔色不良などの症状がみられます。

・腰椎椎間板ヘルニア

腰椎椎間板ヘルニアの症状は、突出した椎間板の位置や大きさによって大きく異なります。多くは腰やお尻に痛みが生じ、突出した椎間板に圧迫された神経側の太ももやふくらはぎに放散するようなしびれと痛みが引き起こされます。痛みやしびれの程度は神経の圧迫の強さなどによって異なりますが、非常に強いケースも多く、歩行や睡眠に支障をきたすケースも少なくありません。安静にしていると 2～3 週間ほどで症状が改善していくことが多いとされています。

しかし、神経の圧迫が強い場合は自然に症状が改善することは少なく、脚に力が入りにくくなる、筋力が低下するといった症状が引き起こされ、痛みを避けるために不自然な体勢を続けることで脊椎が横に曲がった状態（疼痛性側弯）になることもあります。

また、突出した椎間板が大きな場合は排便や排尿などをつかさどる馬尾神経と呼ばれる太い神経が圧迫され、頻尿や残尿感、尿閉、便失禁などの症状を引き起こすことがあります。

・腰痛症

腰痛とは、医学的には肋骨の下あたりからお尻にかけての部位に 1 日以上持続する痛みがあることを指します。重要な点は、安静時に痛みが軽減されるかどうかです。

解離性大動脈瘤や転移性脊椎腫瘍では強い痛みをり、帯状疱疹では神経に沿ったピリピリした痛みを、安静にしていると感じます。一方で、椎体圧迫骨折や椎間板ヘルニアでは体を動かした時に痛みを生じますが、安静にすることで軽快します。

そのほか、原因として考えられる病気の特徴的な症状としては、化膿性椎間板炎や腎盂腎炎では高熱がみられます。椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄症では下肢痛やしびれ、間欠跛行*、さらに筋力低下や排尿障害の症状を伴う場合はより重症なため、早期に専門的な知識を持つ医師に相談する必要があります。

・溶連菌感染症

溶連菌感染症の症状は、感染した溶連菌の種類や感染部位などによって異なります。

A 群溶連菌

感染部位や症状に応じて、急性咽頭炎、猩紅熱、膿痂疹、蜂窩織炎などと呼ばれます。

急性咽頭炎は小児に起こりやすく、2～5 日の潜伏期間の後、突然の発熱、全身倦怠感、喉の痛みなどがみられます。多くの場合、咳や鼻水、鼻づまりなどの症状は目立ちません。

猩紅熱では、赤い点状の発疹や日焼けのような発疹ほっしん、“莓舌”と呼ばれる赤く特徴的な舌の病変などがみられます。

膿痂疹は、細菌による皮膚の感染症で、俗に“とびひ”とも呼ばれます。水疱（水ぶくれ）やびらんができる水疱性膿痂疹、厚いかさぶたができる痂皮性膿痂疹があります。

蜂窩織炎は、細菌による皮下脂肪組織の感染症です。感染が生じた部位が赤く腫れ、熱感と痛みを伴います。

また、溶連菌感染が免疫反応を引き起こし、感染後 2 週間以上経ってから、リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの免疫疾患を発症することもあります。

B 群溶連菌

B 群溶連菌は、経膈分娩による出産の際に母体から新生児に感染することが知られています。新生児が感染すると、まれに肺炎や髄膜炎、敗血症を引き起こすことがあります。

成人が感染した場合、敗血症や肺炎などの原因となることがあります。

C 群溶連菌、G 群溶連菌

主に成人に感染し、敗血症や劇症型溶連菌感染症を引き起こすことがあります。

劇症型溶連菌感染症は、A 群および B 群溶連菌の感染によっても起こることがあります。

まれではありますが、溶連菌が血液や脳に入り込み、突然手足の痛み、腫れ、発熱、血圧の低下が現れ、急速に状態が悪化することが特徴で、死に至ることもあります。

・ライ症候群

ウイルス感染症に続発する肝障害を伴う急性脳症のことを指します。

一般的にインフルエンザウイルスや水痘帯状疱疹ウイルスというたいじょうほうしんウイルスに感染した後にみられ、多くは感染症にかかっている間に解熱鎮痛薬の 1 つであるアスピリンを服用した子どもに生じます。ライ症候群に先行して起こる主なウイルス感染症は、インフルエンザと水痘です。インフルエンザでは高熱、喉の痛み、鼻水、頭痛、関節痛、全身倦怠感などが出現し、水痘では発熱や赤みを伴う発疹ほっしんや水ぶくれがみられます。

このようなウイルス感染症の症状に続いて 1 週間以内に吐き気・嘔吐、悪心などが現れ、そこから 1 日もしないうちに精神症状が現れます。精神症状には以下のようなものが挙げられ、これは頭蓋内の圧力が上昇することで起こります。

健忘（過去のことを部分的または完全に思い出せない）

嗜眠しめん（反応が鈍くなり眠ったような状態になること）

見当識障害（今いる場所や時間が分からなくなる）

錯乱（感情や思考が混乱する）

興奮

など

このような精神症状に続き、けいれん発作や昏睡こんすい（完全に意識が失われる）、呼吸停止が起こり、死に至ることもあります。また、肝臓が正常に機能しなくなることで、消化管出血がみられる場合もあります。

・乱視

軽度の場合には自覚症状はありませんが、乱視が強くなると遠近ともにピントが合いにくくなるため、遠くのものも近くのものもぼやけて見えます。また片方の目で見たときに、ものが二重に見える単眼複視になることがあるほか、乱視は眼精疲労の原因にもなります。幼少期に強い乱視があると弱視を伴う場合もあります。弱視とは、何らかの原因によって子どもの成長過程で視力の発達が止まり、視力が悪い状態になってしまうことです。

・卵巣がん

卵巣がんは、早期段階ではほとんど症状が現れないのが特徴の1つです。

しかし、進行するにしたがってがんは徐々に大きくなり、下腹部にしこりを触れるようになったり、下腹部の張りや痛み、腰の痛みなどが現れたりするようになります。また、大きくなったがんは大腸や膀胱などの臓器を圧迫するため便秘・頻尿などの症状が現れます。さらに大きくなったがんが胃を圧迫するようになると、食欲低下や食後の吐き気・嘔吐おうとなどを引き起こすことも少なくありません。このようにがんが進行して卵巣全体が大きくなると、卵巣の根元がねじれて壊死えしする“卵巣腫瘍茎捻転”を引き起こしたり、がんが破裂したりすることがあります。その結果、激しい腹痛や不正出血が生じ、治療が遅れると命を落とすケースも珍しくはありません。

そして、卵巣がんはおなかの臓器を包む腹膜と呼ばれる膜に広がりやすいという特徴もあります。いったん腹膜にがんの細胞が広がると、おなかの中の臓器や横隔膜などにまでがんが広がっていくこととなり、おなかや胸に水がたまって呼吸苦などを引き起こすケースもあります。実は卵巣が大きくなって圧迫するタイプよりも、腹膜に広がり腹水がたまるタイプのほうが多く、進行も早いです。

また、卵巣がんには女性ホルモンや男性ホルモンの分泌を促すタイプのものもあり、乳房が大きくなったり、体毛が濃くなったりと卵巣がんとは関連が薄いと思えるような症状が目立つこともあります。

・卵巣機能不全

経周期の異常や無月経などが挙げられます。女性ホルモンの分泌や排卵は、卵巣、脳の視床下部ししょうかぶ、脳の下垂体かすいたいと正常にはたらき、連携することで起こっています。卵巣機能不全は、以下のような原因により、卵巣、視床下部、下垂体いずれかの機能が

低下することで引き起こされます。

過度なダイエット

激しい運動（スポーツ選手や部活動の盛んな学生など）

やせ

肥満

精神的・身体的ストレス

精神的ストレスに伴う過食や拒食

卵巣がんなどの病気

がんに対する治療（放射線療法や手術、化学療法など）

・卵巣腫瘍

卵巣は“沈黙の臓器”と呼ばれるように、何らかの病気を発症しても自覚症状はほとんどありません。しかし、進行して腫瘍が大きくなると下腹部の張りや痛み、腰痛などを引き起こします。また、腫瘍が膀胱や大腸を圧迫することで頻尿や便秘を引き起こしたり、性交痛や排便痛が見られたりすることも少なくありません。さらに腫瘍が大きくなると、下腹部を中心に腹囲が異常に拡大し、体表面からしこりを触れるようになります。また、腫瘍が大きくなる前からお腹に水がたまる（腹水）場合があります。なかには胸にも水がたまって（胸水）呼吸困難などの症状を引き起こすことがあります。

そして、卵巣腫瘍は大きくなりすぎると破裂する危険性があります。ある一定の大きさになると卵巣の血管が捻じれる茎捻転を引き起こしたりすることがあり、激しい下腹部の痛みが生じます。茎捻転のときには卵巣を早急に切除しなければ死に至る可能性もあるため注意が必要です。

なお、良性腫瘍は転移を起こすことはありませんが、悪性腫瘍は進行するとがんが腹膜に転移し、お腹の中の全体に転移が広がってしまうケースも少なくありません。実は、卵巣がんの半数はすでにお腹に広がっている状態で発見されます。このような場合には、上述した卵巣腫瘍としての症状だけでなく、食欲不振・倦怠感・けんたいかん・貧血・体重減少などさまざまな全身症状が引き起こされます。

・リウマチ性多発筋痛症

リウマチ性多発筋痛症の主な症状は、肩、頸部けいふ、臀部でんぶ、大腿部だいたいぶなどのこわばりや痛みです。多くの場合、急性の経過で現れ、数日から数週間にかけて典型的な症状が出現します。また、左右対称に症状が現れることも特徴です。高齢の場合、寝たきりの状態になって見つかることもあります。

こわばりや痛みは体を動かさないときに強くなるため、朝の起床時に強く、ある程度体を動かすと軽減します。こわばりと痛み以外に発熱、食欲不振、体重減少、倦怠感、うつ症状などを伴うことがあります。

関節リウマチと名前が似ていますが、手足の小さな関節の痛みや腫れを伴わず、関節よりも筋肉の痛みが強い特徴があります。ただし、肩や股関節こかんせつの痛みは高率にみられます。リウマチ性多発筋痛症の注意すべき併発症として巨細胞性動脈炎があり、その場合、こめかみ周囲の頭痛、嘔み続けたときのあごの違和感、視力障害、38℃以上の発熱などがみられます。

・離人症性障害

離人症とは、自分自身の意識（自我意識）や自己の感覚、または自己を取り巻く環境や物事について現実感が得られず、疎隔されていると感じる症状を指します。また、自分の意識が体から離れていたり、自分自身を客観的に観察したりするような状態に陥ることもあります。

具体的には、以下のような感覚が挙げられます。

これまでの自分の感覚が普段と異なるように繰り返し感じる。

世界がぼやけてみえ、曖昧に夢を見ているかのように感じてしまう。

現実感を喪失し、その意味合いがわからなくなってしまう。

自分の身体の大きさや形が違って感じる。

見たことのない光景を見たことがあると感じたり（デジャヴ：既視感）、見たことがある光景を見たことがないと感じたりする（ジャメヴ：未視感）

また、「自分と世界の間にボールがあり世界がぼやけて感じる」と表現されることもあります。

ただし、離人症状が出ている間は意識状態が混濁していたり、見当識障害が認められたりするわけではなく、現実検討能力は正常に保たれています。

また、離人症は単独で生じることは少なく、多くは解離性障害のその他の症状と共に認められます。

・緑内障

初期の緑内障では、あまりはっきりとした症状が現れないことがほとんどです。最初に自覚される症状としては、見える範囲が狭くなる視野狭窄しやきょうさくや、視野の一部だけが見づらいつといった症状などが挙げられます。このような症状は非常にゆっくりと進行するために気がつきにくいといわれています。

また、片方の眼にだけに症状があらわれた場合には、もう片方の視野で補ってしまうために自覚できないことも多くあります。視野障害や暗点の出現に気付いたときには、すでになら進行してしまっていることも珍しくありません。視野障害が進行すると、視力低下、さらには生活に重度の不便が出ることもあります。進行スピードは緑内障の種類や眼の状態によっても大きく異なり、個人差も大きいとされています。

閉塞隅角緑内障では、“急性緑内障発作”を引き起こすことがあります。急激に眼圧が上昇す

ることで、視力が急速に悪化し、失明のリスクがあります。また、目の痛みやかすみ、充血に加えて、頭痛や吐き気が起こることも特徴的です。暗いところでの長時間の細かい作業や、長時間のうつ伏せ姿勢などが誘因となることがあります。

・りんご病（伝染性紅斑）

ヒトパルボウイルス B19 に感染して 10～20 日後、両頬の紅斑と体にレースや網目状の真っ赤な皮疹が見られるのが特徴です。皮疹はその後、腕や足などにも左右対称に広がりますが、痛みやかゆみなどは伴わず一週間ほどで痕を残さず自然に消えていきます。

また、これらの発疹が現れる一週間ほど前に 37℃ 台の微熱や倦怠感、喉の痛み、鼻水など、風邪のような症状が出ることがあります。しかし、これらの症状も特に治療をすることなく自然に改善することがほとんどです。

一方、大人になって初めてヒトパルボウイルス B19 に感染した場合は、頭痛や関節痛などが生じるケースがあります。特に妊娠初期に初めて感染すると胎児に影響が出ることがあります。またまれですが、血液の赤血球が壊れやすい病気の人は、感染すると急激に貧血が進行して具合が悪くなることがあります。日本人では、遺伝性球状赤血球症という病気で見られることが多いです。

・リンパ管炎

リンパ管炎とは、主に感染症によってリンパ管に生じた炎症を指します。リンパ管炎を発症すると、炎症が生じているリンパ管の走行に一致してスジ状に皮膚の発赤や痛み、腫脹が生じるようになります。

また、リンパ管は末梢から中枢に向かう途中でリンパ節を経由するため、炎症が生じている領域に一致するリンパ節が腫れることもあります。特に特に鼠径部（太ももの付け根）や腋窩などのリンパ節の腫れを確認することが多いです。

リンパ管炎では、皮膚感染症のひとつである蜂窩織炎や皮膚潰瘍、壊死などに至ることもあります。またリンパ管炎が慢性化すると、炎症部位が硬くなります。リンパ管炎ではこうした皮膚症状以外にも、全身性の炎症性反応を反映して発熱や悪寒、全身倦怠感などを見ることがあります。またリンパ管炎では病原体が全身に広がるため敗血症を合併することもあります。

・リンパ節結核

リンパ節結核では、首や鎖骨付近、腋窩えきか（わきの下）、肺や腹部のリンパ節などが腫れます。もっとも多いのは、首に生じるものです。

首や鎖骨、腋窩の腫れであれば体表から触れることもできますが、肺や腹部の場合は腫れを自覚することはできません。そのため、別の理由で撮影されたレントゲン写真や腹部エコーなどをきっかけとして、偶発的にリンパ節の腫れを指摘されることもあります。肺結核や腸

結核など主な病変の周囲のリンパ節が腫大することもあります。

リンパ節結核では、痛みを伴うことが少なく、熱もないことがあります。数週間から数か月と経過が長いのも特徴です。リンパ節のなかに膿うみができて、皮膚へと穴があいて体外へと排泄されることもあります。

リンパ節結核では、肺や腸などに主な結核病変があると、感染した臓器に応じた症状がでることがあります。肺であれば、咳や血痰、腸であれば、腹痛や下痢、血便などです。

・リンパ浮腫

リンパ浮腫を発症するとリンパの流れが滞った腕や脚などにむくみが生じ、だるさや重苦しさを感じるようになります。発症して間もない早期のうちは、症状のある腕や脚を心臓より高い位置に挙げるとむくみが改善します。この時点でのむくみは、むくんでいる部分を押すと凹み（圧痕）、しばらくすると凹みが戻るため“圧痕性浮腫”と呼ばれます。リンパ浮腫が進行すると、リンパがたまっている部位に脂肪も増え、押しても凹まなくなり“非圧痕性浮腫”と呼ばれる状態になります。

リンパが滞ると炎症が起こりやすくなるため、徐々に組織が炎症により固くなります。重症例では皮膚が象の皮膚のように厚くなる“象皮症”と呼ばれる状態になり、皮膚にリンパ液がたまった小さなしこりである“リンパのう胞”ができたり、皮膚からリンパ液が漏れる“リンパ漏”をきたしたりするようになります。

また、リンパ浮腫の患部は蜂窩織炎と呼ばれる炎症を起こしやすく、急な患部の腫れ・熱感・発赤・痛みのほか、高熱や悪寒などの全身症状が現れることもあります。

・老眼

老眼は、多くは40歳代半ば頃から症状が出現し始めます。老眼では近くのものに対しての焦点が合いにくく、近くのものが見えにくいという症状が見られます。そのため、文字に焦点が合うように新聞や本などを目から離して読む、パソコンからの距離を少し離して文字を読むようにする、などの行動変化を伴います。

近くにピントがずれている近視の方ですと、裸眼で近方を見やすくなっているため症状は若干出にくいですが、眼鏡やコンタクトで遠くにピントを合わせていると、手元が見えにくく感じます。遠くにピントがずれている遠視の方では、たとえ遠くを見ているときにでも調節機能を使用しています。つまり、ものを見ているときには常に調節力がはたらいっているのです。遠視の方が近くを見るときには強い調節力を必要としますが、加齢の眼ではそのような調節力を発揮することはできません。したがって遠視の方は老眼症状が早く、強く出現します。患者さんによっては遠くも近くも全てが見えないと訴えます。遠方用の眼鏡と近方用の老眼鏡が共に必要になります。

老眼による症状は、疲れているときに酷く感じることもあります。暗いところでも生じることが多く、夜間の運転などに注意が必要です。また、手元の作業を長時間続けた後、頭痛や

倦怠感、目の疲れを自覚することもあります。さらに老眼を放置することで、肩こりや慢性疲労などの症状につながることもあります。

・ロコモティブシンドローム

年齢を重ねることによって筋力が低下したり、関節や脊椎などの病気を発症したりすることで運動器の機能が低下し、立ったり、歩いたりといった移動機能が低下した状態を指します。運動器の病気がある場合は、その病気による症状が出現します。関節の病気では痛み・腫れ・変形を伴いますし、脊髄や末梢神経の病気では、痛み・しびれ・筋力の低下を伴います。運動器の病気があっても、骨粗しょう症やサルコペニア（筋肉が減弱する疾患）では症状を伴わない場合もあるので注意が必要です。

移動機能が低下することで身体活動量が低下し、肥満などの生活習慣病になりやすいこと、認知機能が低下しやすくなることも問題となります。

・肋間神経痛

特定の肋間神経に生じる痛みであるため、その肋間神経が支配する筋肉や皮膚の領域のみの痛みが生じます。痛みは非常に強いことが多く、広範囲ではなく、範囲が限られた痛みであることが特徴です。

原発性の場合は、肋間神経そのものの痛みより肋間神経が支配する筋群（主に内・外肋間筋）のれん縮による痛みが主であると考えられます。そのため、不自然な姿勢や同じ姿勢を長時間取っていたり、ストレスにさらされたり、肩や背部の筋群が凝ったりすると起きやすくなります。症状は発作的で、数秒～数十秒続くことが特徴です。

一方、続発性の場合は、上半身を動かしたり、前かがみになったときに肋間神経への圧迫が強くなって非常に強い痛みが生じます。また、原発性と異なり、原因となっている病気や異常が取り除かれるまで続くなど、痛みの継続時間が極めて長いことが特徴です。また、帯状疱疹ではピリピリとした表層部の痛みが生じ、特有の皮疹を伴わないことも多いです。